

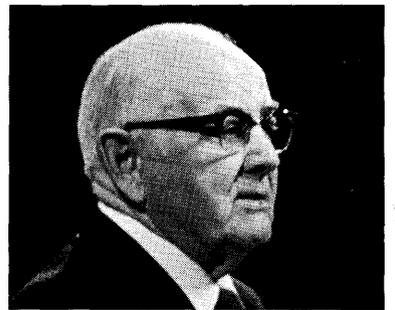
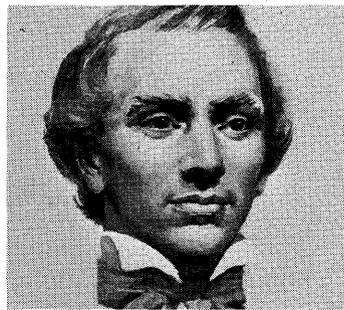
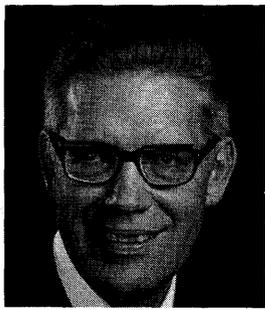
聖徒の道

1977年8月20日発行（毎月1回20日発行）
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

8 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年 8月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプラー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一(翻訳部長)

も く じ

偽りの神々	スペンサー・W・キンボール	349
新しい戒め	ブルース・R・マッコンキー	353
予言者の隣人	ゲリー・アバント	357
リーハイの道を求めて	リン・M・ヒルトン, ホープ・A・ヒルトン	359
もぐら人間	シャーリー・リー	365
両親を愛した予言者	スーザン・アーリントン・マドセン	368
アンモン	マーベル・ジョンズ・ガボット	371
おもちゃばこ	カレン・シャープ	372
人生の競技	ポール・H・ダン	379
主の羊を養う	セオ・E・マキーン	382
類化の原則によって教える	ボイド・K・パッカー	383
ローカル・ニュース		386

聖徒の道 8月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

偽りの神々

大管長
スペンサー・W・キンボール

人間の感覚器官の中で記憶と最も密接な関係にあるのは嗅覚である、という話を聞いたことがある。それが真実だとすると、私にも思い当たることがある。私は朝少しの時間散歩をし、新鮮で心地よい大気を胸いっぱい吸う。長年この美しい地球の土や草木に親しんできた私であるが、何とも言えない快い気持ちになる。

時々、若草や、かなたからそよ風によって運ばれて来るサルビアのにおいなどをかぐと、私はアリゾナで過ごした青年時代の日々を思い出す。アリゾナは乾燥した土地である。しかし、決然として働く人々の手によって実りの良い土地へと変わっていた。

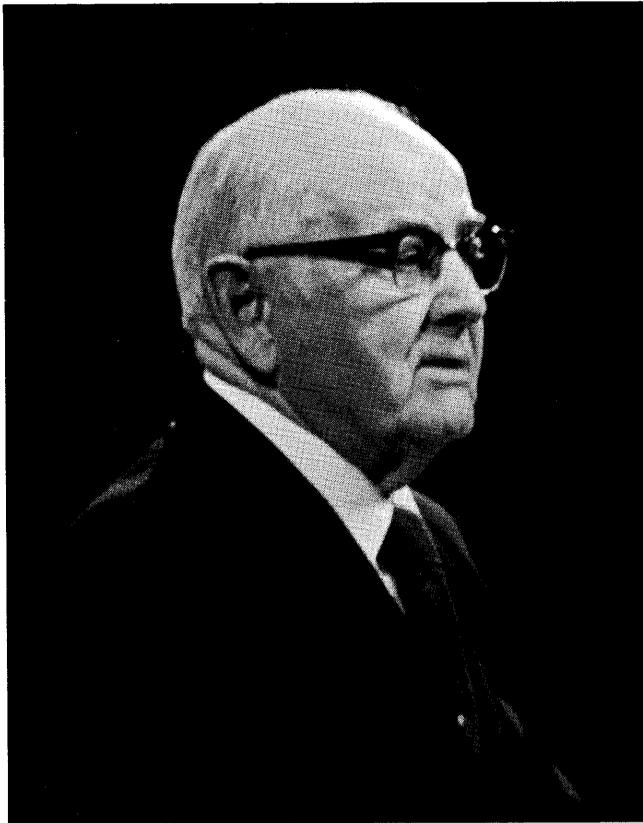
私たちはどんな天候の下でも、土地を耕し、家畜の世話をした。また旅をする時は大抵、馬に乗ったり、幌なしの馬車や荷馬車を使ったものである。幼年時代によく兄や姉たちと駆けっこをして遊んだ。果樹園を駆け抜け、砂ぼこりの立つ細道を下り、とうもろこしや真っ赤に熟したトマト、たまねぎ、かぼちゃのなる畑の間を、私たちは風のように駆け回ったものだった。そんな生活を思うと、その頃の私たちは本当に自然の生活に近かったと思う。

いつであったか、昼食をすませて外を歩いていた時のことである。突然雷雨を伴った黒雲が空一面をおおい始めた。そして、大粒の雨が乾いたほこりっぽい大地に音を立てて

降り出した。その雨をながめながら、私は子供の頃たびたび遭遇した同じような夏の午後の雷雨のことを思い出した。途方もなく大きい入道雲が丘の上に現われ、カラカラに干上がった谷底に待望の雨を降らせてくれるのである。私たちは小屋へ駆け込むと、稲妻が空を駆け巡っている間、腰を下ろしてザーザーと降り続ける滝のような雨を驚嘆のまなこで見つめていた。それが去った後は、空気が洗われてひんやりとし、辺りに土や木や畑の作物の快い香りが漂うのである。

数十年前の私は、日暮れ時にいつも牛を連れて歩いたものである。そして朽ちかけた古い柵の傍らに立ち止まると、柔らかな光とひまわりの香りに包まれて黙って立ち尽くし、そっと自分に問いかけてみるのである。「もし君が世界を造るとしたら、どんな世界だろう。」少し考えると、私は決まって答えた。「そう、ちょうどこんな世界だね」と。

その日もどしゃぶりの雨を見つめながら、私は思った。そして今も思う。これが私たちの住む美しい地球なのだ。にもかかわらず、多くの快い思い出と共に、私の心の中に別の思いが走る。どんよりと垂れ込めた黒い雲は、私にひとつのことを思い出させようとするかのようである。それは長年にわたって教会幹部の心を痛めてきたことであり、実際に世界が始まって以来、主の選ばれた予言者を悩ませ



てきたことでもある。率直に申し上げると、それは世はあまりにも不正に満ちて、危険で重大な時代になっているという事実である。これを考える度に、私は、多く与えられた者からは多く求められるという一般原則を思い出すのである（ルカ12：48参照）。

主は私たちに素晴らしい世界を与えて下さった。そしてその代わりに、私たちに正義を守り神の戒めに従うよう求めておられる。しかし、この世の民が行なっていることと、期待されていることとを比較してみる時に、私は恐ろしさに身震いする。不正が世に満ち、破壊者はこの世で残されている時を最大限に使い、大いなる権力を奮っているかのようである。悪魔は大波のように私たちを飲み込んでしまおうとしている。現在は洪水前のノアの時代と丁度同じ状態にあると私たちは感じている。

私はこれまで、いろいろな責任を受けて各地を旅してきた。美しい田園地方に行く時、広大な美しい空を飛ぶ時、私は思わずその美しさを人間の暗い悲惨な行ないと対比してしまうのである。この美しい地球はもはや人類の存在に絶え切れずにいるのではないだろうか。エノクが地の嘆きを聞いたのを思い出す。「禍なるかな、われは禍なるかな、人間の母なるものよ。われは苦しめり、われは疲れたり、わが子供らの邪曲なるによる。何時の日われ休息せむ。何

私たちの責任は実に明瞭である。
この世のものを追い求めることなく、偶像崇拜をやめ、信仰をもって前進することである。そして、福音をもって敵に向かい、彼らを私たちの兄弟姉妹の中に加えることである。

時の日われより出でたる汚れより潔めらるるや。何時の日われの創り主われを聖めたまいて、われ休息に入り且つ暫しの間わが面の上に正義の留るや。」（モーセ 7：48）

教会幹部は主の目にかなわない事柄に対して絶えず警告を発している。心身の汚れと不浄な環境に対し、不品行、盗み、偽証、虚栄、瀆神に対し、私通、姦淫、同性愛、その他神聖な創造の力を誤用するすべての行為に対し、殺人あるいはそれに類する行為に対し、また神聖を汚すすべての行為に対して警告を発している。

驚いたことに、多くの祝福をいただけてきた人々にさえも、このような警告が必要となっている。信じ難いことではあるが、そのような事柄がある程度聖徒の間でも見受けられるのである。聖徒たちはみたまの賜を多く授かり、永遠を見通す知識を持ち、永遠の生命に至る道を示されているというのに。

しかしながら、悲しいことに、道を示されることは必ずしもその道を歩むことではないということを知っている。実際に多くの聖徒が途中で信仰を投げ出してしまっている。彼らは程度の差はいろいろであるが、サタンとその使いの誘惑に負けて、偶像崇拜の生活に陥っている世の人々の列に加わっていたのである。

私は「偶像崇拜」という言葉を故意に用いた。古代の聖

典を学べば、「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」という戒めが十戒の最初の戒めであることの意味を深く理解することができる。

知識がありながら故意に神の存在とその祝福を拒否する人は少ない。しかし、聖典が示すように、信仰を保つことは身近にあるものに頼ることに比べてずっと困難であるように見えるため、この世的な人々は神への信仰を物質への信頼に転じてしまいがちである。そのため、いつの世であっても、サタンの方に屈して信仰を失った人々は、「肉の権力」(教義と聖約1:19)と「見ることも、聞くことも、物を知ることもできない金、銀、青銅、鉄、木、石の神々」(ダニエル5:23)、すなわち偶像に望みを置くのである。これは旧約聖書の中心をなす考え方である。何であれ、人が最も信頼を置くものはその人の神となる。そして、もしその神が生ける真のイスラエルの神でないならば、それは偶像崇拜につながるのである。

聖典を読む時に、ニーファイの語ったように、それを「自分たちに言った言葉」(I ニーファイ19:24)とみなすならば、古代の偶像崇拜と現在の私たちの行ないとの間に多くの類似点があることを知るであろう。

主は私たちに過去の時代には見られない繁栄を与えて下さった。私たちは豊富な資源を支配し、この地上で生活を営んできた。しかし恐ろしいことに、多くの人々は牛や羊、土地や建物、また富に満たされすぎて、偽りの神であるそれらのものを崇拜し始め、それらのものに支配されるようになってきた。私たちの信仰はもはやこれ以上の物資に耐えきれずにいるのではないだろうか。人々は永遠の幸福を願って多くのお金、株、債券、有価証券、土地、クレジットカード、家具、自動車、その他この世の安易な生活を保証するもので身を固めるためほとんどの時間を費やしている。私たちの務めは、与えられた豊富な資源を家族や定員会で用いて神の王国を築くことであるという事実を見落としているのである。すなわち、伝道、系図、神殿活動を推し進め、子供を立派な主の僕に育て上げ、祝福をあらゆる方法で他の人々に分け与えることが務めなのである。しかしながら私たちは、自分の欲望のままにその祝福を誤用し、モロナイの言うように、「生命のない物を自分の身に飾りながら、飢えている者、貧しい者、はだかである者、病んでいる者、また悩んでいる者たちがあなたたちの前を通り過ぎて行くとき憐まない」(モルモン8:39)のである。

主はこの末日に次のように言われた。「彼らは主の義を打建てたために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども、その姿は人の世の像にしてその本質は一個の偶像なり。そは古びてついにバビロンにて、すなわちついに亡ぶべき大バビロンにて朽ちん。」(教義と聖約1:16)

ある知人が教会のある責任に召されることになった。しかし彼は事業が忙しくて主のみ業に携わる時間があまり取れないので、その召しを受けることができないと考えた。彼は主に奉仕することよりも富を得ることを望んだのであ

る。現在彼は大金持ちになっている。

最近私はおもしろいことを知った。ここに、時価百万ドルの金塊を所有する人がいるとする。しかし実際に彼は地球の薄い地殻に眠る金の埋蔵量の、270億分の1ほどしか所有していないのである。これは人間の頭では想像も及ばないほど微量である。一方、この地球を創造し支配しておられる主は他にも数多くの同じような地球を創造された。それも「無数の世界」(モーセ1:33)をである。そして神権の誓詞と誓約とを受け入れた者は(教義と聖約84:33—44)、「わが父のもてるすべて」(38節)を持つという主の約束を受けている。この偉大な約束を無視して、金やこの世の慰安を追い求めるのは、膨大な比率の誤りとしか言いようがない。そんなささいなもので満足している人間を見るのは悲しいことであり、みじめで情けなくさえ思う。人間はもっとはるかに貴い存在のはずである。

ある若者が伝道を勧められた時、彼は伝道に向いていない、そんな才能はないと答えた。彼が得意としていたのは、買ったばかりの強力な自動車を最高の状態で走らせることだった。彼はその馬力とスピードに陶醉しきっていた。自動車を走らせている時の彼は現実を離れ、別世界にいるような錯覚を味わうのであった。

父親も初めから、「あの子は手を使って何かをするのが好きなんです。それであの子がよければ十分です」と言って満足していたのである。

しかし、神の子供として彼は十分であろうか。この若者は彼の自動車の馬力が海や太陽の力に比べると全く取るに足りないことを理解していなかった。太陽は数多く、皆律法と神権によって支配されているのである。彼がもし主の奉仕の業に携わっていたならば、その神権の力を容易に伸ばすことができたというのに。彼もまた、鋼鉄とゴムと光沢のあるクロムでできたあわれな神で満足しているのである。

老年になって世の仕事で退職し、合わせて教会の仕事からも退職した夫婦がいた。彼らは小型トラックとキャンパーを買って、教会のすべての責任から身を引いて、余生を楽しもうと旅行に出かけた。彼らは神殿に入る時間もなければ、系図の探求や伝道活動をする時間もなかった。彼は大祭司定員会との接触を断ち、自分の家で個人の記録を作る時間さえ持たなかった。支部は、彼らの豊かな経験と指導力を非常に必要としていた。けれども、「終りまで耐え忍ぶ」ことができなかった彼らは、その資格を失ってしまったのである。

数年前に読んだ、ジャングルへ猿を捕えに行った若者たちの話を思い出す。彼らは猿を生け捕るためにいろいろな方法を試みた。網も使った。しかし、網は猿のような小さな動物を傷つけてしまうことを知った。そこでいろいろと策を練り、ひとつの名案に達した。彼らは沢山の小さな箱を作ってそれぞれの箱に猿の手が入る大きさの穴をあけた。そして箱を木の下に置き、その中に猿の大好物の木の実をひとつずつ入れた。

人が去ったのを知ると、猿は木から下りて来て箱を調べ始めた。中に木の実があるのを知って、猿はそれを取ろうと手を穴に突っ込んだ。しかし何度引き抜こうとしても、木の実を握った猿の手は大きすぎて抜き出すことはできなかった。

そこで茂みに隠れて様子をうかがっていた若者たちが出てきて、猿の方に駆け寄った。このあとが興味深い。猿は人間が近づいてくるのを見ると、金切り声を上げ、逃げようとして暴れ回った。しかし握った手を開けば簡単に逃げられたにもかかわらず、猿は木の実を放そうとしなかった。こうして猿は苦もなく生け捕りにされたのである。

これはしばしば人間にも見受けられる。彼らは、この世の的なもの、星の光栄の王国にしか導かないものを固く握って、どんなにせき立てられても、緊急時が来ても日の光栄の王国に至る道を受け入れない。サタンはそういう人々を容易に捕えてしまう。私たちがしつように時間と資源を自分たちのこの世の王国を築くことのために費やすならば、私たちの受け継ぐ世界はまさにその通りの世界となるであろう。

文明人と自負しても、過去のどの民も持たなかった知的洗練さを持っていても、私たちは往々にして偶像崇拜の民と変わりが無い。そしてそれは主の最も忌み嫌われる状態である。

人間はいつの世においても好戦的で、容易に心を乱されて主の再臨に対する準備を怠ってしまう。敵が向かってくると、私たちは莫大な資源を軍艦、戦闘機、ミサイル、防衛施設等、守りと救いをそこに求めるのである。人々は威嚇されると、神の王国に属する者であることを忘れて、戦術を研ぎ、軍人を愛国者と呼ぶ。そして救い主の教えを見失い、サタンの先導するみせかけの愛国主義にまきこまれて行くのである。

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」

「こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。」(マタイ 5 : 44—45)

もし私たちが義しい行ないをしているならば、主は必ず敵の手から私たちを救い出して下さるということを忘れてはいないだろうか。実にこれはアメリカ大陸の住民に対する特別の約束である(IIニーフアイ 1 : 7 参照)。また、主が私たちのために戦って下さる(出エジプト 14 : 14 : 教義と聖約 98 : 37) とある通りである。主は確かにそれをなす力を持っておられる。裏切られた時、主はこのように言われた。「それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。」(マタイ 26 : 53) いかにも恐るべき軍団か想像できるであろう。ヨシャパテ王とその民もまたそのような軍団によって勝利を得た(歴代下 20 章参照)。エリシャが生命の危険にさらされた時、彼は召使をこう言って力づけた。「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから。」(列王下 6 : 16) そして主はその召使の目を開かれた。「彼が見ると、火の馬と火の

戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。」(17節)

エノクも偉大な信仰を持った人で、神の戒めに忠実であり、ひるまずに敵と戦った。「エノクの信仰、神の民を率いるほどに大いなりければ、民の敵来りて彼らと戦えり。エノク主の言を出しけるに、彼の命に従いて地は震い山は逃げ去りぬ。また河はその流れのそとに出で、獅子のほえ声荒野より聞えたり。されば、すべての国民大いに怖れたり。実に、エノクの言はさほどに力あり。」(モーセ 7 : 13)

主が私たちと共にいて下さるのに、一体何を恐れることがあるだろうか。主のみ言葉を受け入れ、主を信じる信仰を行使することはできないものだろうか。私たちの責任は実に明瞭である。この世のものを追い求めることなく、偶像崇拜をやめ、信仰をもって前進することである。そして、福音をもって敵に向かい、彼らを私たちの兄弟姉妹の中に加えることである。

現代の偶像崇拜をやめ、「肉の権力」に頼らないようにすべきである。主はこの時代に世のすべての者にこう断言された。「すべてバビロンに留まる者一人を助くることなからん。」(教義と聖約 64 : 24)

ペテロもペンテコステの日に同様のことを語っている。そして人々はそれを聞いて、「強く心を刺され、ペテロやほかの使徒たちに、『兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか』と言った。」(使徒 2 : 37)

ペテロが答えて言った。「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。」(38節)

間もなく 2000 年を迎えようとする私たちに与えられた戒めも、パウロが語った言葉と同じである。この末日に、主御自身、次のように言っておられる。「この故に、主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果にまで及ぶ。

されば汝ら備えをなせ、まさに来るべき事のために備えをなせ、そは主の来るは近ければなり。」(教義と聖約 1 : 11—12)

私たち各個人と各家庭の歩むべき道は、主が告げておられるように信仰を篤くし、悔い改め、この世における神の王国、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会で主のみ業に携わることでありと信じている。最初は少し困難に見えるかも知れない。しかし真の奉仕の意味を理解し、永遠にかかわる事柄を正しい目をもって見始める時、世のものを離れた代償としてあまりある祝福が注がれるようになるであろう。

ここにこそ唯一真の幸福がある。それゆえ私たちは、このみ業に共に携わるよう全世界の人々を招き、迎え入れるものである。あらゆる犠牲を払って主に仕える決心をしている人々にとって、この道は永遠の生命に至る道である。そして、これ以外にその目標に到達する道はないのである。

新しい戒め

あなた自身と祖先を救いなさい

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

教会の中で長い間、聖典として知られていたふたつの啓示が、1976年4月の総大会で標準聖典に加えられたことになった。そして主を愛し、主の聖なる言葉を大切に、至高者の導きを求める人々は大きな喜びに包まれた。

1976年3月25日に神聖な神殿で開かれた厳粛な会合において、主のみたまの臨在を受けつつ、大管長会と十二使徒会は、全会一致で次のふたつの示現を高価なる真珠に加えることを決定した。

そのひとつは、1836年1月21日にカートランド神殿で予言者ジョセフ・スミスに与えられた、日の光栄の王国に関する示現である。内容は福音を知らないまま死んだ人々の救いと、幼い子供の救いに関するものである。

もうひとつは、1918年10月3日、ユタ州ソルトレーク・シティーでジョセフ・F・スミス大管長に与えられた示現で、主イエス・キリストが霊界を訪れたもうた時の様子を示した示現で、死者の贖いの教義を明らかにするものである。

審議し、熟慮したところに基づき、同時に目前に示された提議の重要性とそれが及ぼす影響を十分にわきまえて、15人の人々が腕を直角に曲げて挙手をした。教会員が予言者、聖見者、啓示を受ける者として支持する指導者たちが、それぞれ目前に提出された重大な発議に賛意を表明したのであった。

使徒と予言者のいる真実の教会では、現在の聖典がすべてではないこと、また将来もそのようなことはないということは広く知られており、非常によく理解されているところである。

神は語り、民は聞く。神の言葉と業に終りはなく、いづれも決して尽きることはない。(モーセ1：4、38参照)

神は人を偏り見ることを御方であり、神を愛し、神に仕える人をひとり残らず祝福して下さる。従って、みたまの賜を受けるために守らなければならない律法に従う人人に、主は啓示を下し、栄えある示現を与えて下さるのである。この示現を受けるのは予言者や使徒に限られてはい

ない。神の賜が注がれることについては、すべての人が神のみ前に平等である。聖霊に動かされて語るなら、どの長老が何を語ろうと、それは聖典である。それは主の意であり、主の精神であり、主の言葉であり、主の声である。(教義と聖約68：1-4参照)

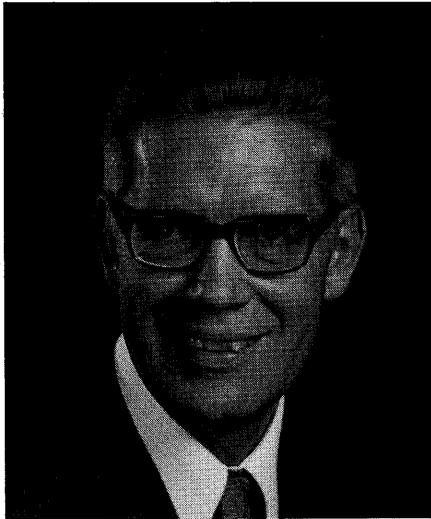
最初の神権時代から、主の民は、教会を導く責任に任命された人が靈感されて語ると、その言葉を集め、選んで、正式の聖典として発表するのが慣例であった。靈感された言葉や著述は皆真実であって、聖徒と自称するすべての人々がこれを受け入れ、信じている。しかし啓示、示現、予言、談話の中でも、選ばれ出版されて公的な場で用いられるようになったものは、民を特別な意味で拘束する力を持つ。すなわち、教会の標準聖典の一部となり、教義や教会運営の手続きを定める標準となり、物差しとなるのである。

標準聖典に加えられたことによって、日の光栄の王国に関する予言者の示現と、死者の贖いに関するジョセフ・F・スミス大管長の示現は、新しい意味を持つようになり、重要性も増し加えられた。これらはいずれもふたつの示現に加えられる前の標準聖典には見いだされない福音の真理を含んでいる。今やこれまで以上に引用され、知られるようになり、今後関係のある主題について述べる時には、標準聖典の他の部分と並んで相互参照の対象となるであろう。

同様に聖典として追加され、公式の承認の印を押される啓示がほかにもあることは明白である。

死者の救いに関するこのふたつの啓示は取り立てて新しいものではない。いずれの示現も内容は知られていたし、聖典に加えられる用意はできており、そこに盛られた原則は広く教えられていた。しかし今や聖徒の公式の聖典に加えられたことによって、ふたつの啓示は新しい戒めとなったのである。言い換えれば、死者の救いという、心を大きく開く教義が要求するすべてのことを述べかつ行なうようにとの新しい神の宣言となったのである。

心を満たさずにはおかないこの教義が啓示によってどのように示されてきたかを、初めから順を追って見ると次の



とおりでである。

1. 死者の救いは聖書に記された教義である。末日の啓示を受けている私たちにとって、これは完全に明らかである。私たちは今日、「死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すぐにきている。そして聞く人は生きるであろう」(ヨハネ5:25)と言われたイエスの言葉の意味を理解している。また十字架上の盗賊に「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」(ルカ23:24)と言われた言葉の本当の意味も知っている。遺体がアリマタヤの墓に横たえられている間主が霊界で伝道されたことについてペテロは告げている(1ペテロ3:18-20, 4:6)が、私たちは今このペテロの言葉を理解している。死者のバプテスマについて語っているパウロの言葉も、意味が通る(1コリント15:29)。囚人を獄屋から出すというイザヤの言葉もゼカリヤの言葉も(イザヤ42:7, 49:9, 61:1, ゼカリヤ9:11)、「シオンの山に」上る救い手たちについて予言したオバデヤの言葉も(オバデヤ21)、皆同様に意味が通る。主の大いなる恐るべき日がくる前にエライジャが来て、「父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせ」、主が来て「のろいをもって地を撃つ」ことのないようにする(欽定訳マラキ4:5-6)というマラキの謎のような約束も、意味が通るようになってくる。これは死者の救いの教義が末日の啓示の中にわかりやすく説かれているからである。

しかしこの神権時代の初めに、ジョセフ・スミスがこれらの聖句をすでに解明していたと考えるのは誤まっている。彼は今日の他の宗派の人々と同様、当時はまだこのことを理解していなかった。

2. 末日に死者の救いの教義を最初に明らかにしたのはモロナイである。モルモンの息子は1823年9月のあの記念すべき夜に現代の最初の末日聖徒を訪れた時、末日にエライジャが来るという約束を完全な言葉にして改めて与えた。

主の再臨に先立ってエライジャが送られるというマラキの約束は、次のように言い換えられた。「見よ、主の大いなる

おそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。」エライジャが父の心を子に、子の心を父に向かわせ、地がのろいをもって撃たれることのないようにするであろう、という聖典の約束は、次のように改められた。「彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らずば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」(ジョセフ・スミス2:38-39)

この改められた聖典の言葉は、やがてジョセフ・スミスにとって大きな意味を持つようになる。しかしまだそれほど霊的な面で教育されていなかったその当時、完全な意味が彼の心に響き渡ったとは考えられない。

3. モルモン経は死者の救いについて非常に明確な鋭い見解を示している。神の賜と力によって翻訳されたこの聖典には、完き永遠の福音が記されている。すなわち、完き福音を知っていた人々を神がどのように導き祝福されたかを記録した書物である。同時に人が永遠の世界で完全な救いを得るためには何をしなければならぬかを記録している。

このことからジョセフ・スミスは、生きている間に真理をわかりやすく、純粋な形で知らされた人々には、死者の救いなどというものはあり得ないことを知った。私達も皆モルモン経を読んで同じことを知ることができる。(アルマ34:32-33, 35-36, IIIニファイ12:20参照)

4. モーセの書は囚人が獄から解放されることに触れている。ジョセフ・スミスは、欽定訳聖書を改訂している過程で、1830年12月に啓示によって、洪水で滅んだ人々が獄に閉じ込められ、キリストが全人類の罪のために苦しみ、霊の獄にいる兄弟たちのためにとりなしをする時まで、さらに御父のもとに戻るまでそこにとどまらなければならないことを知った。モーセの書には、「その日に至るまで彼らは苦悩の中にあるべし」(モーセ7:38-39)と記されている。

5. ノアの時代の囚人は、解き放たれても、日の光栄の報いを受けるというわけではない。記録された示現の中で、1832年2月16日に与えられたものは恐らく最も大いなるものであろう。予言者はこの示現で、ノアから福音を聞かされたがこれを拒んで当時洪水で滅んだ人々は、仮に霊の獄で悔い改めて、福音を受け入れたとしても、日の光栄の安息には入らないことを知った。彼らは現世で真理を知らされたにもかかわらずこれを受け入れなかったので、永遠に月の光栄の受け継ぎしか得られないのである。(教義と聖約76:71, 73, 74参照)

6. アブラハムの書と教義と聖約は、先祖に宣言された約束を明らかにした。先祖に宣言された約束は、聖書の中でも触れているが、教義と聖約とアブラハムの書に極めてわかりやすく、明瞭に記されている。後者の翻訳をジョセフ・スミスが始めたのは、1835年7月であった。

ここでいう先祖とは、アブラハム、イサク、ヤコブのことである。3人はそれぞれ、自分自身と子孫のために約束を受けた。それは日の光栄の結婚を通して、彼らも彼らに

続く子孫も、海岸の砂のように、あるいは天の星のように無数の子孫を得るであろうというものであった。またさらに彼らと子孫を通して、すべての世代の人々が祝福されるであろうという約束も受けた。(創世12:2-3; 13:16; 15:5-6; 17:1-8; 22:17-18; 26:3-5, 24; 28:3-4, 13-14; 35:11参照)

アブラハムの書に見られるように、エホバがアブラハムに与えたもうた約束に、「われは……この権能」すなわちメルケゼデク神権を受ける権利が永遠に「継続」する「という約束を汝に与」えるという言葉がある。この偉大な族長はさらに次のような約束を受けた。「汝によりて継続し、また汝のすえ(すなわち文字通りのすえ、汝の体より出でたるすえ)によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん、すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得ん。」(アブラハム2:11)

アブラハム、イサク、ヤコブ、ならびに彼らの子孫は、神権と福音、それに完き救い、言い換えれば永遠の生命を受ける権利を生まれながらにして持っているのである。(これは神から与えられた約束である。)この権利を受けるのは、「文字通りのすえ、体より出でたるすえ」に及び、福音が地上にある時に生きていた者も、そうでない者も全員含まれる。ここで語られている永遠の生命は、日の光栄の結婚が種になって生じるものである。このことは私たちの間では公理のようなものである。

7. 日の光栄の王国に関するジョセフ・スミスの示現。これは死者の救いに関して具体的に示された最初の示現である。時は1836年1月21日、場所はカートランド神殿の階上の一室であった。その場に居合わせたのは、予言者ジョセフ・スミス、父ジョセフ・スミス・シニア、オリバー・カウドリ(第二の長老で予言者と共に王国の鍵を保有していた)、それに大管長会の副管長を務めていたシドニー・リグドンとフレデリック・G・ウィリアムスである。彼らはエンダウメントの一部の儀式を行っていた。完全なエンダウメントの儀式は、神殿が完成するまで待たなければならなかった。

教義の基が置かれ、主のみたまが力強く一同に注がれたこの状況の下で、とばりは裂け、「私は神の日の光栄の王国とその栄光を見た」と予言者は語っている。彼はその美しさと、「輝く神の御座」を目にし、「そこに御父と御子が座しておられるのを見た。」彼はその聖なる王国にアダムとアブラハム、さらに自分の父と母をも見た。これはこの示現が未来に属するものであることを示している。なぜなら彼の父も母もまだ現世に生きており、父は現に同じ部屋にいたからである。

「私は兄がなぜその王国で受け継ぎを得ているのか不思議に思った。兄がこの世を去ったとき、主はいまだ、イスラエルの第二の集合に着手しておられず、また兄自身罪の赦しを受けるためのバプテスマを受けていなかったからである。」先祖に宣言された約束、アブラハムの子孫がひとり残らず特別な祝福を受ける権利を持っていること、ならび

に霊界で福音が説かれるということについて聖典に記されている言葉を読んでも、予言者が、死者の救いという心を開かずにはおかない概念をまだ心に描き切れないうたことは上の言葉から明らかである。

こういった背景のもとに答えが与えられ、福音は光を放ち生者と死者の両方を包んだのであった。「このため、主の声が私に臨んで言った。『この福音の知識なくして世を去り、もし世にとどまることを許されていれば福音を受け入れたであろうすべての人々は、神の日の光栄の王国を受け継ぐ者となるであろう。さらに、これより後も、福音の知識なくして世を去り、かつ世にとどまっておれば心から福音を受け入れたであろう人々はすべて、この王国を受け継ぐ者となるであろう。主なる私は、すべての人々をその行ないと心の望みに応じて裁くからである。』」(「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」2:380)

教会員は皆この言葉を深く考え、記憶すべきである。機会が与えられていれば、現世で「真心から」福音を受け入れていたに違いない人は皆霊界で福音を受け入れ、神の日の光栄の王国を受け継ぐであろう、という主の約束が上の言葉の中に含まれている。

予言者はこれに続いて、「自己の責任を知り得る年齢に達する前に世を去った子供たちがすべて、天の日の光栄の王国において救われているのを見た」という慰めの言葉を残している。(「教会歴史」2:381。2:382-89参照)

8. 死者の救いの教義を実施できるようにするためエライヤスとエライジャが訪れた。予言者が日の光栄の王国に関する示現を見てから2ヵ月半もたたない内に、主はまずエライヤス、次にエライジャを送って、死者の救いに関する律法が完全に実施できるようにされた。時は1836年4月3日であり、所はカートランド神殿であった。そして、権能と祝福を受けたのは、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリであった。

「エライヤス現われ、アブラハムの福音の神権の時代を委して言えるよう、われらとわれらの子孫によりてすべてわれらの後の代の人々祝福を受くべし、と。」(教義と聖約110:12)

このようにエライヤスは、アブラハムに与えられた大きな任務を回復した。この任務は啓示の中で「アブラハムの福音」と呼ばれており、その意味はアブラハムとその子孫によってすべての世代が祝福されるということである。またアブラハムの子孫は皆永遠に家族を存続させ、永遠に子孫をもうけるという祝福を受ける権利を有するのである。永遠に子孫をもうけることは、永遠の生命の一部である。以上見てきたように、これが先祖になされた約束である。

エライヤスの後にエライジャが訪れた。約束が明らかにされたので、今やこの約束はアブラハムの子孫の心に植えられなければならなかった。そこで記録には次のように記されている。「この示現閉じらるるや、また別の雄大にして栄光ある示現突如開かれたり。すなわち、死を味わうことなく天に上げられし予言者エライジャわれらの前に立ちて

いひ、見よ、ここに於て正にその時は全く至れるなり。そは嘗てマラキの口によりて言われしことにして、すなわち主の大なるおそるべき日の来らん前に、彼(エライジャ)遣わさるべし。すなわちエライジャは来りて先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせん、然らずば、全地は咀いをもて打たるべし、と言われしことを証する時なり。この故に、この末日の神権の時代の鍵を汝の手に委す。これによりて汝らは、主の大なるおそるべき日のすでに近づきて正に門口にあるを知るを得ん。」(教義と聖約110:13-16)

このようにしてエライジャはこの地上に結び固めの力を回復した。この力によって先祖になされた約束は、人々の生活の中で実際に成就されることになった。ジョセフ・スミスが「エライヤス、エライジャ、メシヤ」について述べた偉大な説教に明らかのように、エライジャは私たちがまず生者のために、次に死者のために福音のすべての儀式を行なえるようにするために訪れたのである。(Teachings of the Prophet Joseph Smith「予言者ジョセフ・スミスの教え」pp. 335-41)

私たちは神殿で結婚して、エライヤスが約束したように、アブラハム、イサク、ヤコブの祝福を受けている。これはエライジャが回復した結び固めの力のお陰である。ひとたび私たちが自分と子孫のためにこの祝福を受けると、私たちは今度は祖先にも同じ祝福が与えられるように努める。この祖先というのは、福音を知らないまま死んだが、この祝福の与えられる時代に住んでいれば福音を真心から受け入れていたに違いない人々である。神は、あなた自身と祖先を救いなさい、と命じておられる。

9. ジョセフ・スミスとその後継者は、死者の救いに関して聖徒たちを導いてきた。予言者の時代から今日に至るまで、新しく生じる問題を、規則に規則を加え、戒めに戒めを加えてひとつずつ靈感によって解きながら、代々の大管長は死者の救いという大事業について主の民を導いてきた。ジョセフ・スミスは数多く説教を残しているし、書簡も2通残している。後者は教義と聖約127章と128章に収められている。子供を結び固める方法や対象について、ウィルフォード・ウッドラフ大管長や他の人々が決定を下している。また必要な探求を助けるために、立派な系図の施設が備えられている。家族組織は各所に設けられており、この業は前進している。

10. ジョセフ・F・スミスが死者の贖いについて見た示現は、死者の救いに関する私たちの理解を深めている。この近代の示現は特に次の事柄を明らかにしている。

第1：これは、死者の救いに関する当教会の確立された教義を完全にわかりやすく確認した示現である。

第2：スミス大管長は「死者が群れをなしている」のを見た。彼らは皆地上の4千年間の混乱した期間に死んだ者たちである。その中には「おびただしい数の義人の霊」がいた。「彼らは死すべき世にあった間イエスの証に忠実であった者たち」である。この時に主が偉大な贖いの計画を再

び宣言されたのはこれらの霊たちに対してであった。

第3：邪悪な者や罪深い者の中には、主は直接行って声をあげることをされなかった。「見よ、主は義人の中から軍勢を組織し、使者を任命して権威と権能とを与え、闇の中にいる者たち、さらにはすべての人の霊のもとに福音の光を携えて行くように命じられた。このようにして死者に福音が宣べ伝えられた。」

第4：地獄と呼ばれている部分だけでなく、霊界全体が、霊の獄とみなされていることが明確に示されている。イエスが彼らのところに来られた時、イエスは「忠実であった捕われ人に自由を」宣言された。というのは、彼らは「肉と霊とが長い間分離している状態を捕われ」と考えていたからである。

第5：「私は、この神権時代の忠実な長老たちが、死者の霊が住む広大な世界において闇に包まれ罪のかせにつながれている者たちの間で悔い改めの福音と神の生みたまひし独り子の犠牲を通じてもたらされた贖いの福音を、この世を去った後も引き続き宣べ伝えているのを見た。」

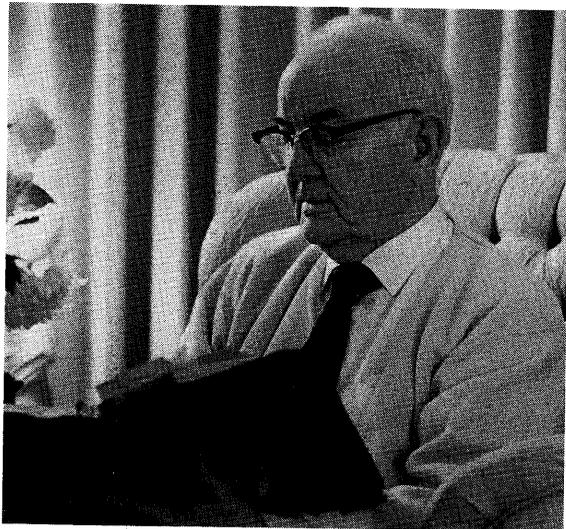
それゆえ、地上の神の王国の忠実な会員は、現世にある間に死んだ祖先を探求して、彼らのために救いと昇栄の儀式を、この目的のために建てられた神聖な建物の中で執行する。そしてこの世を去ると、これらの忠実な者たちは、自分の祖先を捜し出して、永遠の福音の救いの真理を教える。このようにして福音は、絶えず死者の間で説かれていく。

11. 死者の救いやその他あらゆる事柄について今後もさらに啓示が与えられる。いずれの事柄についてもまだ最後の言葉は発せられていない。生ける水の流れは、今後もあらゆる真理の源である永遠の泉から流れ出るであろう。救いの教義については私たちが今知っている事柄よりもまだ知らない事柄の方が多のである。

私たちがひとつの民として、すでに受けている数々の真理をすべて信じ、それに沿った生活をするなら、私たちはさらに主の意と精神と声を聞くであろう。何をいつ受けるかは私たちが次第である。主は私たちにたくさんのことを告げたいと願っておられるが、私たちはこれまでのところ天から知識を引きおろせるほどには、一致していないし、霊的な水準にも達していないのである。

死者の救いに関するこれらふたつの啓示を含めて、これまで数々の啓示を私たちに示して下さった神を私たちは賛美する。そして私たちの信仰と献身が十分深いものとなり、十分信じ、従うことによって、主からさらに永遠の言葉をいただけるように願っている。私たちがよく知れば知るほど多くの聖典を与えられ、標準聖典の中に加えられるものが多くなり、天父の王国において永遠の生命を得る可能性も高くなるのである。律法を守ろうにも、明らかにされなければ決して守ることはできない。知りすぎることがあるだろうか。啓示を受けすぎることがあるだろうか。また聖典に加えすぎることがあるだろうか。

今も語り、声を発し尽きることなく語りかける神を礼拝できるということは、何と素晴らしいことだろうか。



予言者の隣人

ゲリー・アバント

スペンサー・W・キンボール大管長は、350万の教会員から、予言者、聖見者、啓示を受ける者として尊敬されている。

ソルトレーク・シティーワード部の教会員にとって、彼は予言者、聖見者、啓示を受ける者であると同時に、特別な人でもある。キンボール大管長は彼らの隣人なのである。

「私たちは総大会を管理されるキンボール大管長とワード部と地域社会のつつましい一員であるキンボール大管長の両方を見ることができるとですよ」と、ワード部の監督は語った。

「2年前、クリスマスプログラムで話をさせていただきませんかとお願ひしたことがあります。スケジュールを調べてみますと言われて、その日のうちに電話があり、ちょうど町にいるはずなので幸い話ができるとのことでした。監督から与えられる責任は何でも喜んで果たしたいという、ワード部のほかの人々と全く同じようにご自分を考えたいらっしゃるんですよ。」

監督は、予言者のいる場でワード部の指導者に召された時の気持ちをこう語っている。

「私が召しを受けた時、ステーキ部長の話では、このことをキンボール大管長にはかたら私をご自分のワード部の監督として承認されたということでした。」

私は恐れのおもって召しを受けました。けれども、大管長に対してではありません。大管長は非常に親切で温和な方です。彼と同じワード部にいられるのは特権です。

大管長がおられることでワード全体が祝福を受けています。私の長男が間もなく執事に聖任されるという時、予言者に聖餐をパスできる大きな特権について話し合ったものです。

断食証会は特に素晴らしい会です。教会中で、スペンサ

ー・W・キンボールは主の予言者ですと教会員が証しているのですが、キンボール大管長の前で彼の顔を見ながらその証ができるのは本当に素晴らしいことです。」

監督は、キンボール姉妹がワード部にいることが靈性を豊かにしているとも語っている。「彼女は特に扶助協会の姉妹たちにとって励みになっています。もう何年も靈的生活のレッスンを教えておられて、大勢の人が感化を受けて聖典に親しんでいます。」

彼女は実に満点の人です。家にいれば必ず集會に出席しますし、家庭訪問教師として訪問の割当てを受けた姉妹たちに対して、心から愛と関心を寄せています。」

監督やワード部の会員たちは、キンボール大管長が自分でしないことは決して教会員にしないとは言わない人であると、口をそろえて言う。

「教会員に地域の政治討論会には活発に出るようという書簡を送れば、夫妻そろって地域の討論会に出て、2列目の席にすわっておられるし、1974年のエネルギー危機の際にはできるだけ車を使わず歩いて集會に出席するようにと教会指導者に通達すると、ご一緒に徒歩で教会にいらっしゃるのです。」

菜園や食糧貯蔵の大切さを教会員に説けば、ちゃんとご自分の庭には菜園も果樹もあります。

ワード部で食料品の在庫調査をした時には、調査に参加して下さいました。」

監督はキンボール大管長の「実行！」というモットーを紹介してくれた。

「大管長は何でもすぐに実行されます。ワード部予算の手紙を送ると真っ先に返事が来たのはキンボール大管長でした。」

感心するのは、大管長は30億の人々の予言者で、350万人



から予言者として敬われている人であるのに、いつでも病人を見舞う時間があることです。私が病人の見舞いに行くと、すでにキンボール大管長が見舞っておられるのです。病状がわからない時は、見舞ってもよいかどうか私に尋ねられるんですよ。」

キンボール大管長は、在宅時には、自分のワード部の聖餐会に出席する。彼はここでも、話し手が聖句を読んだり引用したりすると、自分の聖典をめくっては模範となっている。一心に話を聞くのである。

毎月の訪問を受け持つホームティーチャーは、ワード部のほかの人たちと同じように扱ってほしいし、参加もしたいという夫妻の気持ちを語っている。

「ユタ伝道部が組織された時、すべての会員は宣教師であるというメッセージを再度強調することになりました。そのため、福音を友人に分かち合うように勧めるフィルムストリップを、ホームティーチャーが各家庭で見せることになっていました。そこで私たちは大管長にそれを見たいですかとうかがったところ、はいというお返事でした。大管長ご自身がそのフィルムストリップに出ているのに、それを見せてもらいたいとおっしゃるのです。」

ホームティーチングの割当てが最近変わって、18歳の祭司がキンボール夫妻の家庭を担当した。

彼はこのように言う。「何回も訪問しました。とっても歓迎して下さい、くつろげるんですよ。帰る前にいつも何か話して下さい、教会でもホームティーチングの時のことをよく話題にされます。ぼくが聖餐の祝福の座につこうとすると、途中で手をさっと伸ばしてぼくの手を握って下さるんです。」

シニアホームティーチャーはキンボール家を担当して5、6年になる。「初めて受け持った頃は、大管長はまだ使徒で

した。初めて訪問した晩に自分たちに期待されていることが何かよくわかりました。『聖典の話を読みましょうか』とおっしゃったんです。それ以来ずっと、キンボール家では訪問のたびに聖典を読んで話し合っています。」

以前のホームティーチャーは訪問の終りに予言者の家でひざまずいて祈ることは素晴らしい祝福だったと語っている。

「大管長は私たちか、キンボール姉妹かに祈りを頼まれますが、時々、ご自分でお祈りをしました。大管長はいつでも教会員みんなのために祈っています。そのことがとても印象的です。」

キンボール大管長の家の通りを隔てた向かい側に住んでいる副監督は、朝早くから夜遅くまで大管長の書斎は明るいと話している。「キンボール大管長より早起きしようと思ったら、本当に早く起きなければだめですよ」と、彼は言う。

「ある夕方、家内がキンボール姉妹が準備していらっしゃるレッスンのことで聞きたいことがあって、いつ時間があいているか聞くためにふたりでちょっとお寄りしたことがあります。するとキンボール大管長がドアをあけて、『どうぞ、一緒に食事しませんか』とおっしゃるんです。」

おふたりでミルクとパンを食べておいでで、私が育った田舎ではそれが昔ながらの夕食なものですから、とってもおいしそうでした。一緒にしたいのは山々でしたが、うちの食事の支度もしなくてはならないので失礼しました。」

また、あるホームティーチャーはこう語る。「キンボール大管長のように謙遜で誠実な人はいませんよ。ホームティーチングに行くと、ほかのことはさておいて、いつも訪問を感謝して下さい。ホームティーチャーを真っ先に考えて下さるんです。」

約4カ月間のあわただしい準備を終えた私たちは、いよいよアラビアへ行くばかりとなった。中東の友人たちに間もなく出発する旨を伝えた。私たちの頭の中とかばんの中には、古代の文書や近代の探検家から得た情報、聖典から得たヒントがぎっしり詰まっていた。大きな使命と目前に迫った冒険のスリルを満身に感じつつ、私たちは机上で再建したリーハイの道をできるだけ多くたどろうと、1976年1月15日にソルトレーク・シティを発った。ソルトレーク・シティにあるデゼルトニュース社の写真家ジェリー・シルバーとワシントンD.C.に住む私たちの25歳の娘シンシアが同行した。

合衆国の国務省は、旅行の順路を逆にして、アラビア海に面するオーマンのサララから始めてエルサレムの町を最後に訪れるよう私たちに勧めてくれた。こうした方が訪問する4カ国に入国する時の困難を最少限に食止めることができるからであった。もっとも、順路を逆にしても数え切れない困難が待ち受けていた。不安な軍事情勢のためふたつの地域を訪れることができなかった。一つは紅海沿いのサウジアラビアの細長い地域で、リーハイがレミュエルの谷とシェゼルの間を旅したと私たちが判断した所であり、もう一つは、アブハから東へアラビア海に至る砂漠の部分

で、リーハイがバウンテフルの地に向かって通ったと私たちが考えた地域である。それでも私たちはこの両方の地域の上空を飛んで、恐らくリーハイの道として最も可能性の高い経路と考えられる部分を全部走破した満足を覚えた。順路を反対に取りはしたが、私たちは発見した事柄をリーハイが経験していったと思われる順序に従って取り上げていく。

砂漠におけるリーハイの生活様式に関する私たちの結論は、私たちが観察したベドウィンの生活様式が2,600年前の彼らの祖先の生活様式と変わらないという前提の上に立っていることを私たちは十分わきまえている。私たちが見たものは非常に役に立つ、解明の糸口に富んだものである。しかし、考古学、人類学、言語学の分野でさらに相当の研究が積み重ねられないと、証明された事実としては受け入れられないことは承知している。

この企画のために私たちが中東で過ごせる期間は5週間しかなかった。私たちが旅行手段としてらくだやろばではなく冷房のきいた自動車を選んだのは、その方が楽だったこともあるが、時間が制約されていたことも理由のひとつであった。現在は街道の大部分に舗装道路が走っている。これらの道路は井戸や地勢が大きな制約となって、古代の

リーハイの道を求めて

——第2部 実地探索——

リン・M・ヒルトン、ホープ・A・ヒルトン

写真：ジェラルド・W・シルバー



アカバ湾を南に望む。商船のみなとにサウジアラビアの山々が見える。エルサレムを出たリーハイは、アカバ湾を通り、紅海に接するこの湾を目にしたことだろう。

香料街道にびったり沿っている。

エルサレムを出たリーハイは南方あるいは東方いずれの方向に向かったとしても、すぐに砂漠に出たはずである。エルサレム周辺では坂が急で、かどの鋭い、岩がごつごつしているのに比べ、砂漠は不毛で砂地が多く、比較的滑らかな外観を呈している。この対照的な地勢を見た私たちは、リーハイが砂漠に到達する前に、あるいは砂漠が近づくやすぐにらくだを入手したに違いないと確信した。どの経路を取ってエルサレムを出たにしても、リーハイはらくだの市場に来て、ろばをらくだに交換したと思われる。あるいは、お金を携帯してきてそれを使ったことも考えられる。金銀をおいてきたからと言って一文なしで出発したとは限らない。らくだの市場は今もそこにある。大きなほこりっぽい市場で、買手と売手がかけひきする声でにぎやかである。

これまで聖地を15回訪れた私たちは、リーハイがエルサレムの町から出る道は2つしかないことを知っていた。東へ行く道は、エルサレムからアカバに通じる3つの主要な街道の2つに通じている。「聖徒の道」7月号図4参照。私たちはこれら3つの街道をすべて踏査した。急な塩ソルトの山を越える今だ野道にすぎないもうひとつの道があったが、これはたどらなかつた。街道の大部分を私たちに同行した友人サアディ・ファタフィタはこの小道を徒歩で通ったことがあって、今でも通れるがむずかしい、と説明してくれた。これらの街道を皆比較吟味した結果、エリコ付近まで行きそこで南下し、死海の西岸にある吹きさらしのクムランを通り過ぎる中央の道がリーハイの取った経路ではないかと思うようになった。もっともリーハイが王の公道を利用した可能性もある。エルサレムから東に向かうとすぐに町をはずれる。地形が坂を下る形になっていることから、ティトウスの時代にキリスト教徒が逃亡の道としてこれを選んだ理由がよくわかる。

最も低い地点が海面下393mで地上一番低いという死海の西岸は、あまり気持ちのよい所ではない。私たちはそこに全く荒廃した地を見た。細長い断層による凹地に鉱物を含んだ水がよどんでいた。しかしこの西岸に沿って真水の泉が多数あったことに、私たちは驚いた。またこの地方にずっと住んでいたサリム・サアドによると、ここは古代に街道としてよく使用されていたとのことであった。

リーハイは死海の東側よりも西岸を選んだと私たちは判断した。それは西側を行けば、王の公道のようにアンモン、モアブ、エドム等の外国でなく、依然として自分の国であるユダに在ることになるからである。また西岸であれば、エルサレムに住んでいる間に命をねらわれた者であることが発覚しやすいヘブロン、ベエルシバ等、ユダヤ人の密集地を避けることもできるからである。

ワジ・アル・アラバ

私たちはなぜすべての道路がアカバに通じているのか不思議に思った。しかしガリラヤの海、ヨルダン川、死海が

並ぶ長い谷のようになった低地、すなわちワジ・アル・アラバに入ると容易にそのわけがわかった。これは大きい「地溝」の一部であって、レバノンのベカ峡谷から南ははるか紅海沿岸のアカバ湾にまで達している。

ワジ・アル・アラバの北部では水は死海の北部に流れ込み、ワジの南端では紅海に注ぎ込む。私たちが見渡したところ、それは広いほこりっぽい砂の平地で、夏は暑く、冬は寒い所であった。高い山々が5~18キロ離れて谷の両側にそびえている。雨量はごくわずかで、所々に草やぎょりゅうの木が群生するだけである。王の公道以外には、この平原がエルサレムから南へ行く唯一の道である。昔から遊牧民のベドウィンがここに断続的に住みついてきた。私たちは数多くのベドウィンの天幕を、またやぎ、羊、らくだがワジの中で草を食べているのを見た。あたかも古代の情景を眼前にしているかのようであった。

紀元1世紀にギリシャ人の歴史家ストラボは、「らくだの商人は星を頼りに夜しか〔この地方を〕旅行しなかつた。そして船乗りと同じように旅をする時は水を携帯した」と書いている。リーハイも同じようにしたかも知れない。

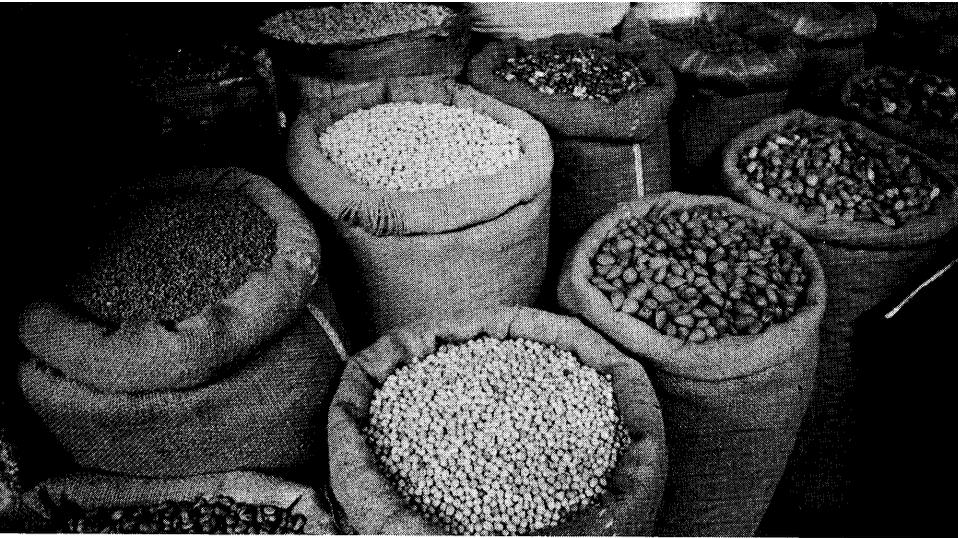
家族全員をひきつれ、動物には食糧を積んでいたのも、もし追手がいたとすれば、リーハイはとてども対抗できなかったに違いない。また、リーハイが隠れようとしても、追手は砂漠の住民や追跡術に長けた者を雇うことができたであろう。

しかし私たちは友人から、リーハイが利用したと思われるアラビア半島の不動の規則について知らされた。それは逃込み場に関する規則である。一度族長が逃亡者を受け入れることに同意すれば、その部族はいかなる敵の攻撃に対してもその人を保護しなければならない。もちろん族長が拒否すれば、逃亡者は即座に殺されることもあり得る、ということである。リーハイは一部族の管轄圏内から他の部族の管轄圏に移る時、この古代のおきての恩恵を受けていたかも知れない。

食糧

私たちはリーハイが旅に「食糧」を持って出たことを知っている(1ニーファイ2:4)。そこで私たちはそれが何であったかをつきとめようと試みた。生活に必要なものとして天幕があったことはわかっている。また、小麦、小麦粉、大麦、粉ミルク、オリーブ油またはごま油、オリーブ、なつめやしの実などの食物、若干の料理の道具、寝具、弓矢、ナイフなどの武器も入っていたと思われる。

私たちは若いベドウィンの少年から彼の天幕に来よう招かれた。この家族は遊牧民の標準から見ると比較的裕福な方であった。天幕に近づくと彼らの所有物を全部見ることができた。ろばが入口のそばで草を食べており、馬とらくだが少し離れた所にいた。そしてその足下に羊と七面鳥がいた。固く黒い天幕の垂れぶたをあけて中に入ると、料理のかめやなべの一杯入った手織りのかごが中央の柱にぶら下がっているのが目に入った。またあるかごには水を運ぶ



エルサレムの市場で売られている木の実、穀物、薬味。現代の中東はリーハイの時代の中東と多くの点で異なっているが、食料品は当時とほとんど変わらない。

皮袋が半分くらい入っていた。炉端に敷物や枕があって、すみにはくらや馬勒くらがおいてあった。また反対側のすみには一家の衣裳ダンスの役目を果たしている古ぼけた段ボールの箱が見えた。窓はなく、天幕の入口と燃えている石炭が唯一の光源であった。おもちゃはひとつもなかった。一部羊毛で作った白い部分以外は黒く重い、やぎの毛で作った天幕は、綱と天幕の杭で据えつけられていた。彼らが使える水は皮袋に入っているものだけであった。

天幕には女性の区画があって、私たちの一行に加わっていた女性たちはそこで彼らの衣裳や装飾品を身につけてみるように勧められた。女性は多彩で美しく花や動物模様にししゅうの施された黒い服を着用する。そしていつもかずきで頭をおおっている。かずきの色は部族の習慣によって異なる。彼らは天幕から出る時は黒のベールで顔をおおうのであった。

男性の着る物は簡単であって、暖い季節には白の長いシャツと飾帯である。冬には荒い羊毛を手で紡いで作った暗色のアバと呼ばれるオーバーをその上に着る。これは非常に暖く、雨露をしのいでくれる。また毛布の代用にもなる。

以上のことは皆興味のある事柄である。なぜなら、ベドウィンの生活様式は紀元前600年から今日までほとんど変わっていないからである。従って、ベドウィンの友人の所有物は、リーハイの一行が旅に携帯したものに似ていると思われる。

リーハイは富に恵まれていたにもかかわらず、荷物を少ししか持たずに旅行したに違いない。その今ひとつの理由は、砂漠に住む部族が略奪しようと襲ってくるのを避ける必要があったことにある。小さな一団がたくさん物を持っていると、自然に彼らの目にとまるからであった。

リーハイは多分、やぎの皮で作った袋に食糧を入れて運んだものと思われる。この袋は今でもアラビア半島の街道という街道で使用されている。アカバの市場で私たちは、成長し切った大きなやぎの皮で作った古代のものと同じ型の水袋を見つけた。2本の前足は生皮のひもで縫い合わされて取り手となり、背中の開口部分も生皮で縫い合わされて

このアラブの商人は、やぎの皮袋に蜂蜜を入れていた。やぎの皮袋は、蜂蜜をはじめ、穀物、水、乳香等の入れ物として、過去何千年も使用されてきた。

いた。後足は取り去られて水密になっていた。そして、首の部分が水袋の口になっていた。

この水袋はかなり古いものに見えたが、売り手からこの品は少なくとも10代使われてきた品であると告げられた時には実に驚いた。疑わしく思った私たちは、皮をどのようになめして、それほど長期にわたってしなやかに水密の状態を維持できるのかと質問した。するとその商人は、新しい皮袋に蜂蜜とらくだの乳を入れ、6カ月地中に埋めるのだと答えた。この期間がたつて地中から取り出すと、毛は抜けて皮は完全になめされているという。アラビアの友人はこれは確かに皮なめしの方法のひとつであり、よくなめされた袋は1代はおろか、200年、300年あるいはそれ以上使えたと断言していた。

アカバと紅海

旅人がエルサレムから紅海の東岸まで陸路に行くのに、アカバを通過しないで行く道はない。確かに今日でもアカバを避けて通る道は一本も存在しない。リーハイは家族がアカバの町に長く留まることを好まなかった。事実一行はそこから3日路を荒野の奥に進んでいる。しかし彼らは少なくともここで水を補給していたであろう。あるいは一晩泊まっていたかも知れない。ここに達するまでに彼らは10日から2週間旅行していたと思われるので、堂々としたなつめやしや輝くばかりに花咲く西洋きょうちくとうの群生するオアシスは、人にも動物にも大きな喜びを与えたであろう。私たちは20以上のおいしい水のわく井戸を見た。その内のあるものは深さ2メートル少々しかなかった。

アカバの近くでは、紅海の澄んだ青い水が、明かるい砂漠の日光を受けてちらちら光る。水深40メートルまで視界がきくということは驚くばかりである。様々な色をした巨大なさんごがあり、これが何キロにもわたって浜を飾っていた。そして澄んだ水に美しい色をした熱帯魚がたくさん泳いでいた。エルサレムから10日間砂漠の旅をしてきたリーハイにとって、この地は快い所であっただろう。

私たちは研究の結果、鉄とはがねの製造が遅くとも紀元

前9世紀からここで行なわれていることを知っていた。そのため、古代のソロモン王の精錬所が今は戦場になっていることを知った私たちはがっかりした。

ニーファイはバウンテフルで船を造っていた頃、鉱石をとくため獣皮でふいごを作ったと述べている。

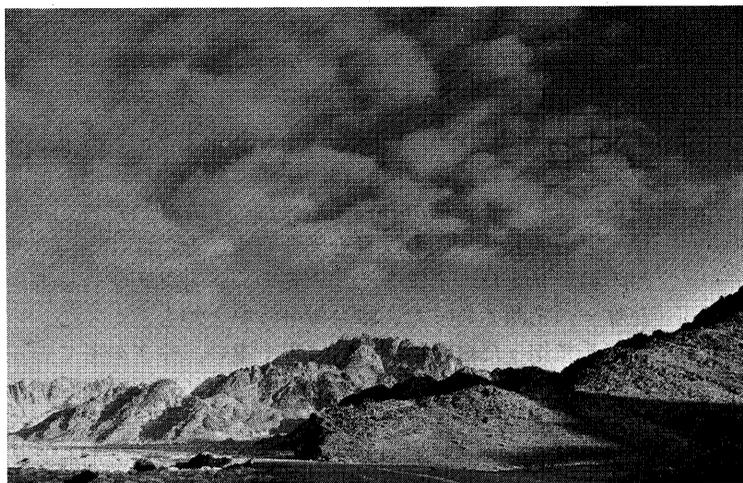
バウンテフルであったと思われるサララの古いスーク(市場)で獣皮のふいごを見つけた時には、とてもうれしかった。黒くなったふいごが幾つもかじ屋の作業場の壁にひっそりかけられていた。そこにいたかじ屋によると、これらのふいごは、その人の父、父の父、というふうには24代も逆のぼった時代(約600年昔)から使用されてきたと言う。私たちはこのようなふいごを一度も見たことがなかった。このふいごはヨーロッパのふいごのようにポンプの形をしておらず、むしろアコーデオンの形に近かった。なめしたやぎの皮の首は、木製の連結チューブの周囲に縛りつけられ、木のチューブは鉄の筒につながれていた。そして後者が火の下にすえつけられたのである。これを見た私は、エルサレムのイスラエル博物館で見た紀元前1000年の土器のパイプを思い出した。このパイプもふいごから炉に空気を送りこむのに使われたものであった。サララのふいごの獣皮の4本の足は反対側に折って注意深く縛ってあった。背中中は全部あいていて、皮は2本の棒にしっかり定着されていた。そのため上の方でばちっとしめる婦人もの財布のように見えた。かじ屋はこの2本の棒を片手で持ち、獣皮の中に空気を取り入れ、次に袋を押さえて空気を首から押し出す方法を実際に見せてくれた。私たちはそれが本当に効果的な道具であることに目を見張った。そしてこのふいごはニーファイの使ったふいごとほとんど寸分変わらないのではないかと思った。

砂漠の中ではどれほど苦勞して注意深く道具を作らなければならないかを知った私たちは、鉱石を見つけてそれをとかし、自分の道具を作り、自分の船を造ることができたニーファイがいかに英雄のような人物であったかがよく理解できた。

旅行に出る前に、私たちは、リーハイがエルサレムから「三日の間荒野の中を」(Iニーファイ2:6)進んだことについて書いた注解を2, 3読んだ。しかし5節は、彼らが「紅海の手元に近い国境」、すなわち今日のアカバに違いない所に着いてから3日路であることを明らかにしている。ただ本文の中に私たちを困惑させる部分がある。ニーファイは「紅海の手元に近い国境のそばへきて」、それから「さらに一そう紅海に近い国境にある荒野の中を進んで行った」と記している(Iニーファイ2:5)。彼はなぜそのような言葉の使い分けをしたのだろうか。その地に着いたところで、ニーファイが使った表現の違いが私たちに明らかになった。

海岸沿いの平原は狭く、紅海とアラビア半島の山々にはさまれている。最も幅の広い所はジグダ付近で、77キロ程である(図6, 8参照)。地元の住民からティハマと呼ばれているこの道は古代の香料街道であって、リーハイの一行

アカバを出たリーハイは、ワジ・ウム・ユルファインを通ったと思われる。ここはアラビアを南下する唯一のルートであり、現在ハイウェイが走っている。遠くはアカバ湾である。



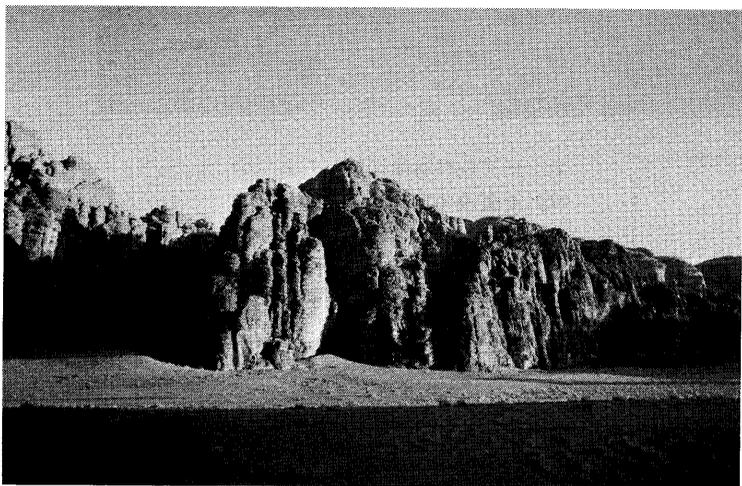
ワジ・ウム・ユルファインはさらに大きなワジ・エル・アフアルに合流する。リーハイが南に方向を転じ、ワジ・エル・アフアルを通過して紅海に向かった地点は、ここからあまり遠くないと思われる。

が通ったと考えて最も矛盾のない経路である。私たちはリーハイが3日でどれくらい移動できるかを計算し、アカバから南にその距離を伸ばして、レミュエルの谷とレーマンの川と考えられる地形がないかどうかでいねいに調べてみた。当然のことながら、私たちはすべてのワジ、海岸、山を細かく調べた。

地理的に見てできる論理的なことと言えば、——もっともほかにできることはなかったが、——紅海から反対の方角に向かって、連山をぬって広い大きなくぼ地を東に丘の上に登っていくことであった。嵐のために凹凸のある所は皆砂や砂利が埋まって、頂上(高度940m)に至るまで40キロにわたって路床ができていた。動物を持たない人々は、坂の急なごつごつした岩の丘陵を少しずつ登るか、切りとがった頂上を体力を消耗しながら上り下りして、山々を越えて行ったのであろう。しかし明らかにワジは便利な「ハイウェイ」である。荷物を一杯背負ったらくだが何頭も、私たちの車を見おろしながら追い越して行った事実が、それを如実に示している。

頂上(図7参照)からワジは分岐する。一つは砂漠の中を東の方向に進む。しかしもうひとつのワジは、南の方へゆるいカーブを描きながら何キロも下って海岸に達する。このエル・アフアルというワジはアカバ湾の東岸に平行し

ワジ・エル・アファル。「レミュエルの谷」(Iニーファイ2:10)と言われたのはここであろうか。このワジは海岸まで約160キロ、なだらかに傾斜している。らくだの旅に理想的な地面である。



紅海に近づくと、ワジ・エル・アファルは高くごつごつした崖の側をう回する。ニーファイが主のみたまにとらわれて登った山(Iニーファイ11:1参照)もこのようであったと思われる。

て走っているが、山があるためにアカバ湾を見ることはできなかった。私たちは紅海に近い国境を指すと思われるこのワジを通して、サウジアラビアのアル・ベダと呼ばれるオアシスのある村まで行った。

このようにして私たちは、以上の地理上の特徴とニーファイが残した描写をつき合わせた。もちろんこの推測による答えは仮のものである。ニーファイの言っていることと私たちの発見は符合したが、一つの問題はニーファイの記録の順序通りになっていないことである。紅海に一層近い国境は、アカバからアル・フマイダまでの28キロを指しているのかも知れない。この部分では街道と海岸は事実上同一である。そうすると紅海に「近い」国道というのは、東に方角を変え、ワジ・ウム・ユルファインを、さらに南にワジ・エル・アファルを合計83キロ進み、アル・ベダに達する道を指すものであろう。ニーファイが後になって「紅海の近くの国境に沿って」(Iニーファイ16:14)と言っているのは、恐らく海岸線を半分近く南へ下がったジッダのあたりで、再び海岸を旅していた時のことを指すものであろう。しかし「近い」と「一層近い」という言葉が何を指すかについて、私たちが発見したこともこれに劣らず可能性が高く、私たちの胸を踊らせるものであった。この発見に従えば、アル・ベダはレミュエルの谷に留まったリーハ

イの宿営であったと考えられる。この彼の結論を支持する手がかりが2, 3あった。紅海に「近い国境」は、彼らが長時間過ごした高地のワジであって、「一層近い」国境は最初の山々に到達するまでの東に向かう海岸沿いの平原を指すらしいことが、私たちには明らかに思えた。突然ニーファイの言葉が私たちにとって大きな意味を持って迫ってきた。

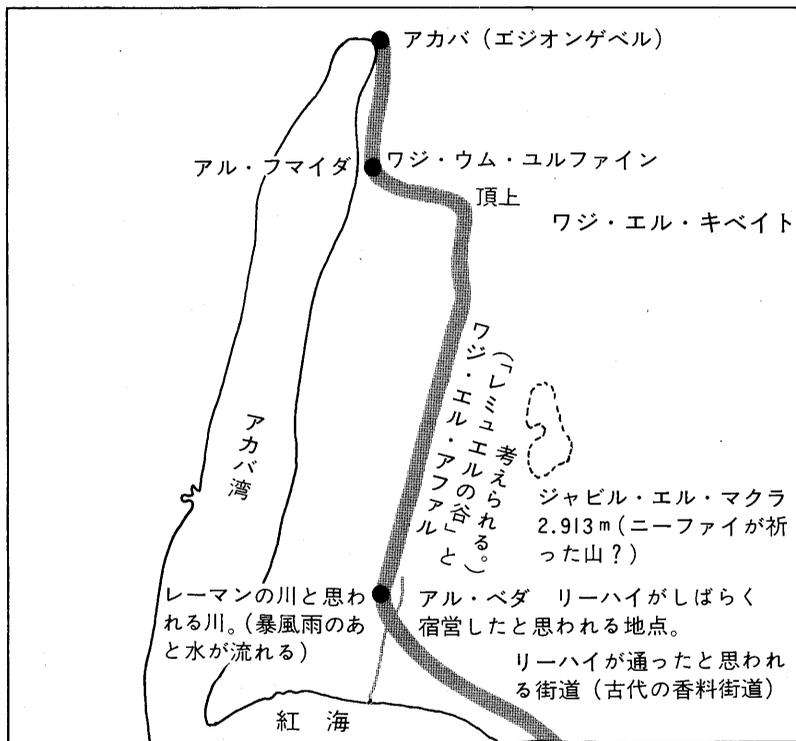
父リーハイはある谷の紅海に注ぐ川のそばに天幕を張った(Iニーファイ2:8)。今日アラビア半島のどこを捜しても、一年中水が流れていて、海まで達するような川は一つも存在しない。この地域の年間降雨量は、1ないし15センチである。半島の南西の隅にあるイエーメンの山地やオーマンのドホファルのサララにあるカラ山系ではもう少し雨量が多い。しかしそれでも水が絶えず流れる川はできない。従って今日、これがレーマンと名づけられた川であると言える川は存在しない。古代の記録を見てもそのような川は出てこない。もしそのような川が存在していれば、人々が何代にもわたってそのそばに住んでいたであろう。しかしここでこの問題が終わるわけではない。

英語で「川」と翻訳されている旧約聖書のヘブル語にはふたつの言葉がある。そのひとつ「ナハラー」は「冬の奔流」という意味であるが、ワジ・アル・アリシュ、すなわちアルノン川を指す時には「川」と翻訳されている。この種の川は夏は乾あがってしまう。しかし冬につきものの雷雨が襲うと文字通り急流となる。考古学者で私たちの案内をしてくれた友人サリム・サアドによると、ワジは暴風雨の後2, 3日急流になるということであり、またアラビア半島では雨期はほとんど1月と2月に限られているということである。水が何もさえぎるものもない丘を走って、坂を下り、底の広いワジに流れ込む時の力は「相当なもの」である。

もうひとつのヘブル語「ナハル」は一年中枯れない川を意味する。この言葉は旧約聖書でユーフラテス川やナイル川を指す時に使われている。この場合確かにどちらも絶えず水の流れる川である。以上のことからわかるように、ヘブル語は2種類の「川」が使い分けられるようになっている。

雷雨の水がワジ・エル・アファルの流域を流れるのを見て、リーハイが「冬の奔流」、すなわちなハラーという言葉で「川」と呼んだことが十分考えられる。また、アル・ベダにあった泉から小さな川が流れ出て、34キロ南へ下って紅海に注いだ可能性もある。当時余分な泉から流れ出していた水が、今日ではオアシスにある大規模な菜園の栽培に吸収されてしまっているということもある。

もちろんワジ・エル・アファルもワジ・ウム・ユルファインも、私たちが発見して私たちだけが知っているワジではない。これらのワジは、紅海の街道に沿って南方からアカバに至る何世紀も使われてきた香料街道の一部である。ただこの道の上にはあまり大した建物や施設は見えなかった。近代になって造られた洪水制御の防壁が散見されたが、いずれのワジでも主流の中にはベドウィンの天幕はひとつ



アラビアの西海岸に沿った古代の香料街道のオアシス。この地方では、水がなければ旅ができない。リーハイもこのようなオアシスを利用したことだろう。

図7

リーハイが宿営したレミュエルの谷と考えられる地点。(古代の香料街道を含む)

距離

アカバからアル・フマイダまで (海岸沿いに旅をして)……29キロ
 アル・フマイダからワジ・ウム・ユルファインの頂上まで……40キロ
 頂上からワジ・エル・アファルのアル・ベダまで……53キロ
 3日間の旅 (I ニーファイ 2 : 6) の合計 (推定) は……122キロ
 アル・ベダ (レーマン川の河口と考えられる) から紅海まで……34キロ

もなかった。しかし、ワジの主流に流れ込む小さな支流の河口では、天幕や動物の群れを見かけた。ワジの底には草やぎょりゅうの木が群生していて、らくだの豊富なえさとなっていた。これらの葉をろばやらくだ、羊、やぎがうよううと食べていた。

私たちは新しい舗装道路を車で走った。この道は私たちのガイドの判断では、昔の隊商の街道に沿っていた。何世紀もらくだが歩いて通ると踏み固められて行進しやすい勾配となることと、らくだに乗る人が二点間の最短距離を進むようになったに違いないことを考えれば、これはうなずけることである。私たちの推論が正しければ、私たちは正にワジ・エル・アファルの中のリーハイが通った道を行

たことになる。その時の私たちの気持ちを表現することはむずかしい。もしアル・ベダが実際に、レミュエルの谷の宿营地であれば、そこを基地としてリーハイの息子たちは2度もエルサレムに帰ったのである。そして、ここでリーハイは真鍮版を読み、研究して、家族に彼ら自身の系図について語ったのである。ここでリーハイは燔祭を捧げた。また鉄の棒と救い主の降臨について夢で示現を見たのもここであった。ニーファイもここで、キリストの地上の生活、使徒と共に歩いた伝道生活、キリストファー・コロンブスの航海、約束の地の異邦人の大国に住む自分の子孫、最後に回復される教会について示現を見た。またここでニーファイは栽培したオリーブの木と野性のオリーブの木のため (p.373へ続く)

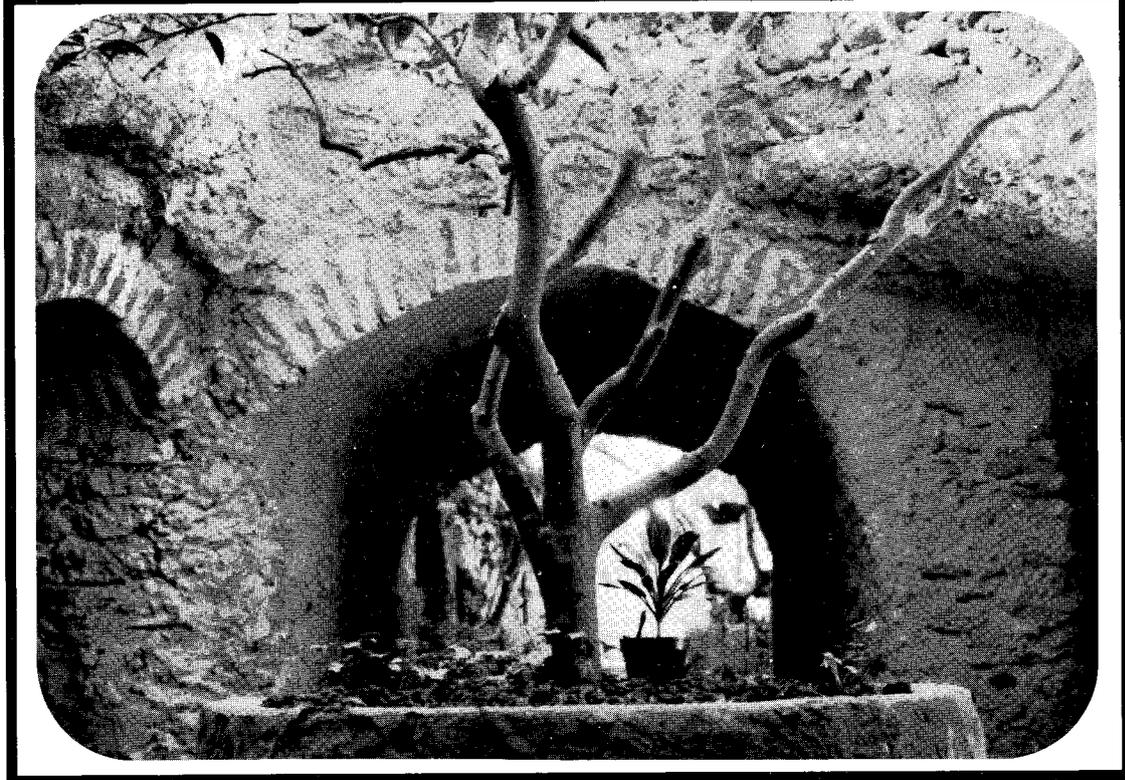


小さな
お友だちへ



もぐら人間

シャーリー・リー

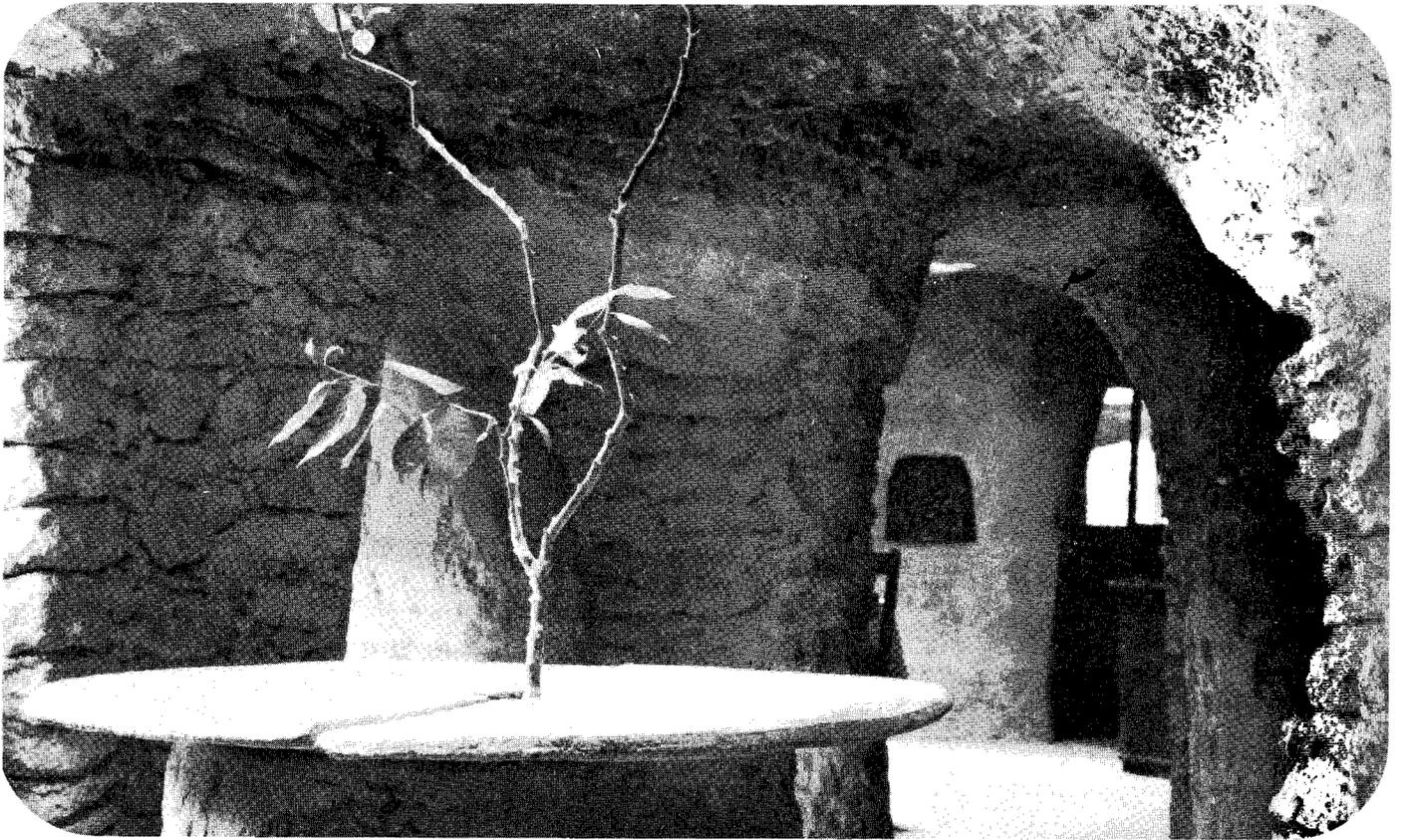


50年ほど昔、地下に大きなあなをほって、そこに住んだめずらしい男がいた。人々はその男を「もぐら人間」とよんでいた。

このもぐら人間のふうがわりな家は、カリフォルニア州のフレズノから北へ少し行ったところに建っている。

この男はバルダセア・フォレストィアーと言
い、1879年にシシリア島のメッシナで生まれた。
21さいのときにアメリカにわたり、ニューヨー
クの地下鉄現場ではたらいていた。

お金がたまったので、バルダセアはカリフォ
ルニアに移り、フレズノの近くに広い土地を買



った。そこは現在のようなかんがいしせつがなく、さばくのような土地であった。気温は50度にもなり、じつに住みにくい土地だった。からから天気のため、くだ物の木も育たない。

ニューヨークの地下鉄工事をしていたときのあのすずしさを思い出したバルダセアは、あなをほることを思いたった。はじめは2つか3つ部屋があればよいと思ったが、40年後にはどうだろう。何十もの部屋になっていた。ほとんど部屋は地下3メートルの深さにある。しかし中には地下7メートルの部屋もあり、地下三階とになっていた。

バルダセアは身長が1.6メートルくらいしかなかったが、何百トンという土を手押し車で外に運び出した。それに、部屋や通路つうろの配置にか

けては、生まれながらの才能をもっていたし、もっともがんじょうな建築方法も知っていた。こうして、地下にめずらしくおもしろい部屋がいくつも作られた。

このもぐら人間の地下生活は、2つの部屋と、ふうがわりな家具から始まった。かべの内側をけずっていすを作った。たなもあった。各部屋には天窓があり、外の光と空気が入っている。そして冬になると、その天窓に草をかぶせ、雨が入らないようにする。

バルダセアの家は、年とともに大きくなり、寝室がふたつ、リビングルーム、台所、礼拝堂、図書室、浴室なども作られた。ほかに、折りたたみ式のベッド、だんろ、スライド式の窓、ピクチャーウインドウ、まただれが来たのかを

前もって知るためののぞき窓やのぞきあななど、バルダセアが作ったものをあげるときりがない。

しばらくすると、今度はてきとうな日光と空気が入る地下の庭に、花や野菜、木、つる植物などを植えた。植物がよく育つためには、どれくらいの光をどのようにとり入れたらよいか、いろいろと実験を重ねたりもした。

また、つぎ木の実験も行なった。その結果、ひとつの木からいろいろな果物がとれた。地下1メートルに植えられた「セカンドストーリー」には、ネーブル、バレンシアオレンジ、

スイートレモン、サワーレモン、タンジャリン、グレープフルーツ、チードロの7種類の果物になる。このほかにも、地下の庭には、ブドウ、くわの実、ハイビスカス、バラ、なつめやし、アボカド、アーモンド、まるめろ、いちご、なし、いちじく、むくげ、びわなど数多くの木々が植えられている。

植物がよく育つようにと、バルダセアは、120キロもはなれた地から、ロームという土をわざわざ運んできた。必要な水は井戸からポンプを使ってくみあげた。また池を作って、金魚や熱



たいぎよ帯魚をかっていた。

ここ数年の間に、人類は地球を飛びたち、月面におりたつた。また海底の開発も進んでいる。地中に住む人についての空想科学小説は数えきれないほどある。しかしこれは実際にあった話である。才能にめぐまれたこの「モグラ人間」は、50年以上も昔、おもしろくてめずらしい、住みよい家を建てたのである。毎年大ぜいの人が、この家を訪れ、おどろきの目を見はっている。

両親を愛した予言者

おはなし：スーザン・アーリントン・マドセン

教会にはんたいする大ぜいの人たちが、予言者ジョセフ・スミスとその家族のいのちをねらっていました。

1838年の秋、予言者は、ミズーリ州ファーウエストでとらえられてしまいました。しばらく、ほろ馬車におしこまれるとき、ジョセフ・スミスは、お母さんにわかれをいわせてくださいとたのみました。けれども、ゆるされませんでした。そこで、ジョセフ・スミスは、大声でお母さんをよびました。そして、馬車の中を見まわすと、ほろが少しやぶれていました。ジョセフ・スミスは、そのやぶれ目から手を出すと、お母さんの手にさわりました。そしてわかれをつげたのでした。ほんの少しの間でしたが、お母さんの手にさわるとは、ジョセフにとって、とても大切でした。まもなく、馬車は予言者をのせて、くらいリバティーのろうごくへと走りさりました。



ジョセフは、いつも両親をふかく愛していました。その話をしましょう。

まだ小さい子どものころ、ジョセフは足の手じゅつをうけました。お母さんはそばにいてもつらい思いをするだけだと考えたジョセフは、かなしいのをがまんして、お母さんにへやから出てもらいました。そして、手じゅつ台の上で



なく、お父さんにだかれて手じゅつをうけたい
といました。

ジョセフは、おとなになってからは、ベッド
のそばについて、なん日も、びょう気の両親の
かんびょうをしました。また、引っこすたびに、
両親の家を近くにたてて、いつも会えるように
しました。

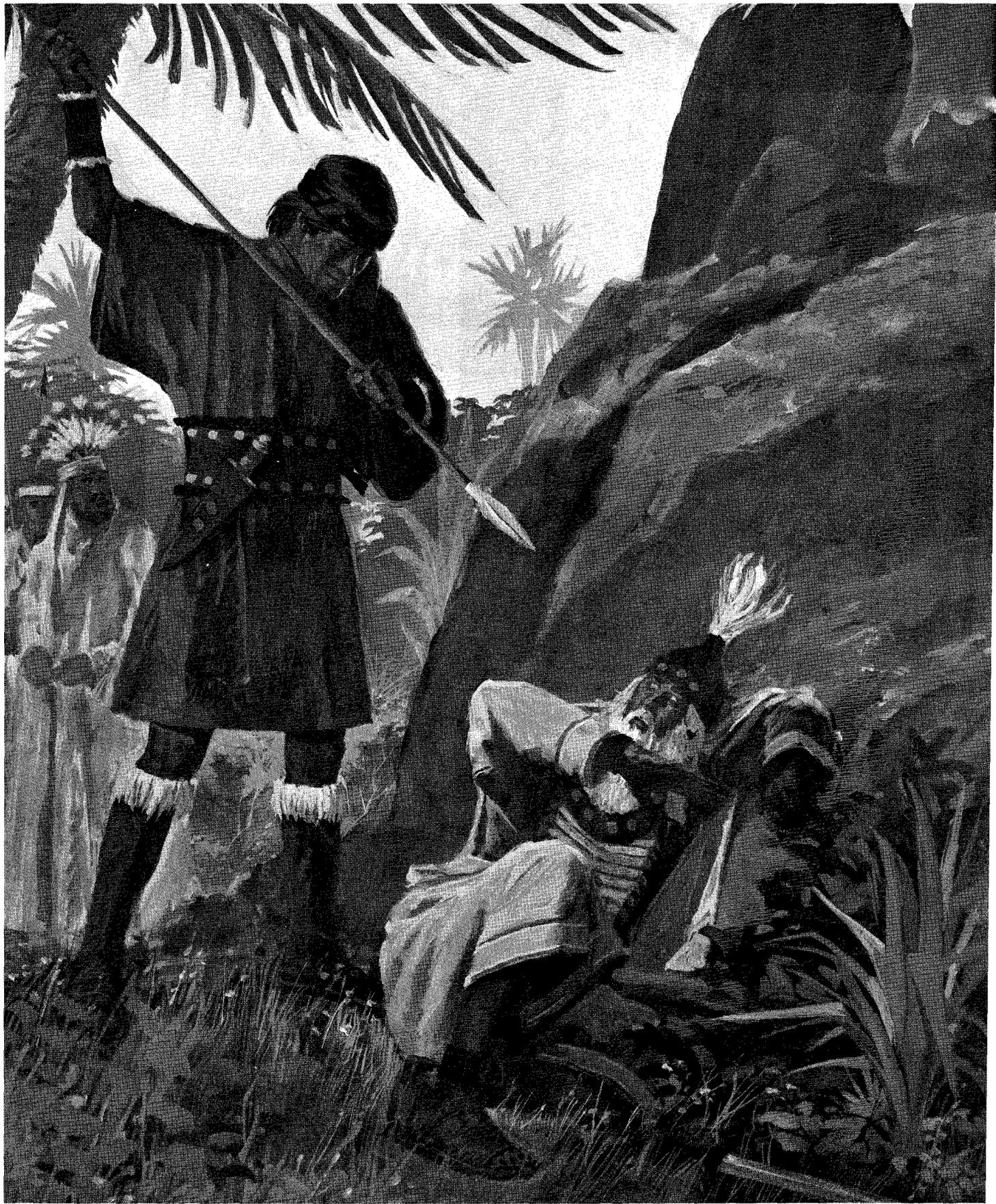
ジョセフのお父さんは、1830年にバプテスマ
をうけました。その時のことを、お母さんはつ
ぎのように日記に書いています。「ジョセフは、
きしに立ってお父さんの手を取り、目になみだ
をためて言った。『神さま、かんしゃします。父
がバプテスマをうけて、イエス・キリストの本
当の教会に入るのを見ることができました。』」

ジョセフが弟のウィリアムとけんかをしたと
きのことです。ジョセフはすぐにお父さんのと
ころへ行って、どうすればよいかを聞きました。
お父さんのちゅうこくにすなおにしたがったジ
ョセフは、弟となかよくなりました。ジョセフ
はお父さんを愛し、うやまっていました。

ジョセフは、両親のことをつぎのように言っ
ています。「たくさんのことをけいけんしてきた
両親は、わたしたちをいつも正しくみちびいて
くれます。」

両親もジョセフを愛し、いつも見まもってく
れました。ジョセフが森で神さまとイエス・キ
リストにお会いしたとき、はじめてこのことを
聞いたのは両親でした。ふたりとも、ジョセフ
をしんじてくれました。1830年4月6日に教会
ができたとき、そこに両親もいました。また、
1833年に、はじめてしゅくふくしになったのは、
ジョセフのお父さんでした。

ジョセフは、両親を心から愛していました。
ジョセフは日記にこのように書いています。「わ
たしの母は、愛のふかい人です。主はいつも父
をまもってくださいます。」





アンモン

おはなし：マーベル・ジョンズ・ガボット

強い王様から、「もし私の命を助けてくれるなら、好きなものをなんでもあげよう。国の半分でもいいぞ」と言われたら、あなたは何を望みますか。

アンモンとイシメルの地の王様ラモーナイは、ミドーナの地に向かっていました。そこには、アンモンの兄弟たちがとらえられているのです。

ある日、アンモンは主の声を聞きました。「ミドーナの地へ行きなさい。あなたの兄弟アロンたちがろうに入れられている。」アンモンは、そのとき初めて兄弟たちがろうの中にいることを知りました。アンモンから神様のことを学んだラモーナイ王も、いっしょに行くと言いました。ミドーナの地の王はラモーナイ王の友だちだったからです。こうしてふたりはミドーナの地へ出発しました。

そのとちゅうのことです。ふたりはラモーナイ王のお父さんに会いました。お父さんは全国の王様でした。

「そのニーファイ人とどこへ行くのだ。」父王はおこって言いました。ラモーナイ王は、アンモンがよい人であることを話しました。ラモーナイ王の羊をまもってくれたこと、またラモーナイ王とイシメルの地の人々が神様を信じてバプテスマを受けたことを、せつめいしました。

それを聞いた父王はとてもおこりました。アンモンは大うそつきの悪者だと言って、ラモーナイ王につるぎでアンモンを殺すように命じました。

ラモーナイ王は、父王に言いかえしました。「わたしはアンモンを殺さない。アンモンの兄弟たちも助けるつもりです。あの人たちは悪い人ではない。神のほんとうのよげん者です。」

すると、父王はおこってつるぎをぬき、アンモンとむすこのラモーナイ王にきりかかってきました。そのときアンモンは前に立ちふさがって、父王の手からつるぎをとりあげました。すると父王は、アンモンに言いました。「もし私の命を助けてくれるなら、なんでも好きなものをあげよう。国の半分でもいい。」

アンモンは答えて言いました。「それならば、私の兄弟たちをろうやから出して下さい。そして、もうラモーナイ王に命令することをやめ、ラモーナイ王の思う通りに国をおさめさせて下さい。」

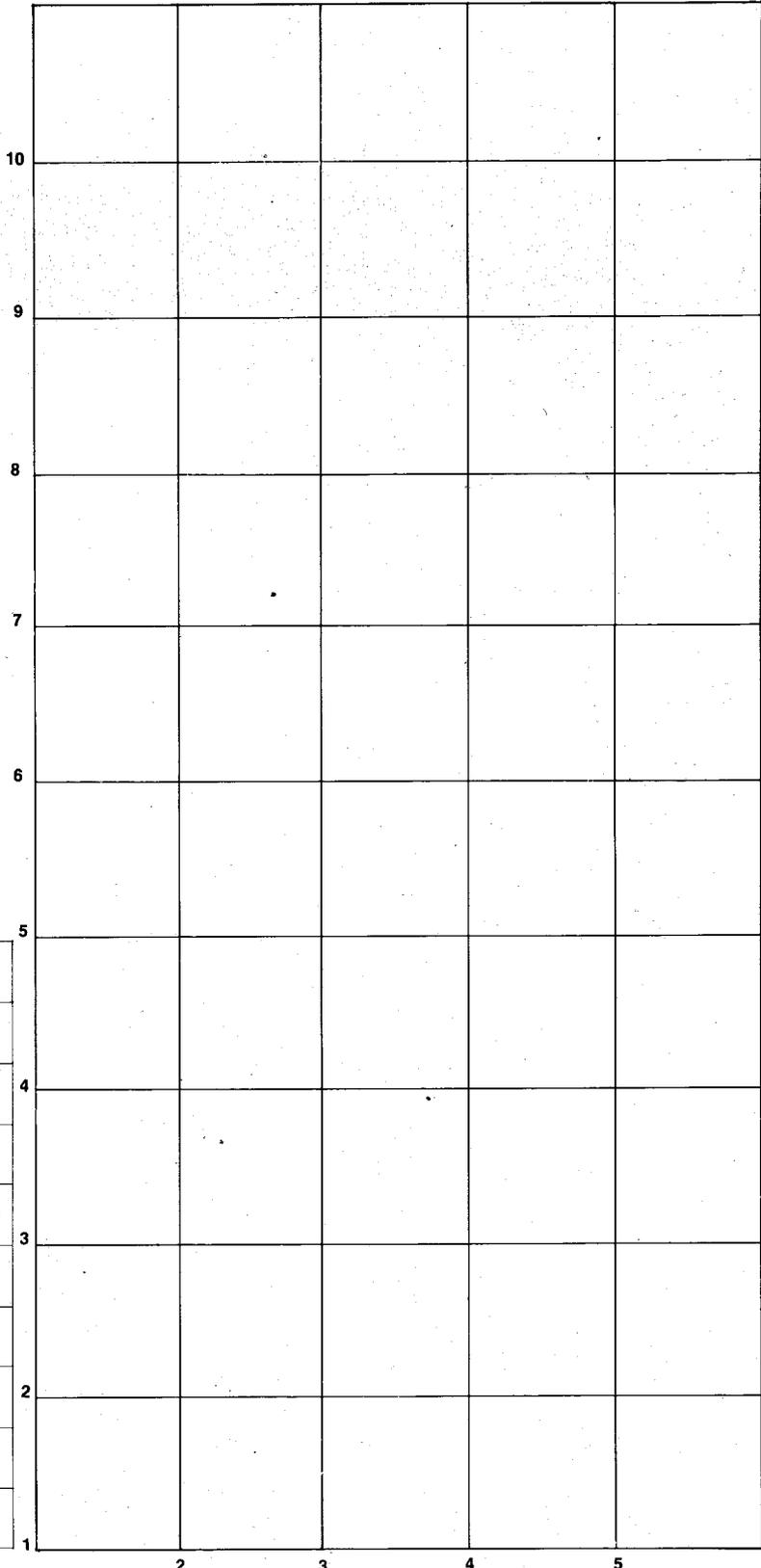
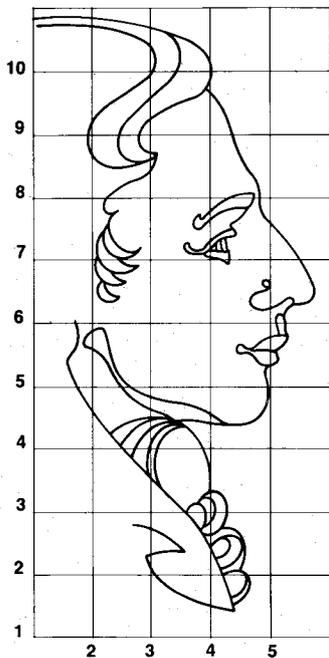
父王は、これを聞いておどろきました。アンモンが自分のためには何も望まなかったからです。そして、父王は自分の命が助かったことを喜びました。また、強くてかしこいアンモンがむすこのラモーナイ王を愛していることを知って、うれしく思いました。このようにして、アンモンの望みはすべてかなえられたのです。父王は言いました。「どうか私にも、もっと神様のことを教えて下さい。」

アンモンの、人を思いやるやさしさと勇気のおかげで、アンモンの兄弟や友だちの命が助かりました。そして、人々に神様の言葉を伝える大きな門を開いたのです。

おもちゃばこ



ジョセフ・スミスを
かいてみましょう。
左の絵をまねて、大きく
かいてみましょう。



とえ話を説明した。ここで5組の夫婦の砂漠の結婚式が盛大に祝われ、季節毎に種まきと作物の収穫が行なわれた。一行に忠告を与え、未知の目的地に導くリアホナがリーハイの天幕の外におかれ、一行が大いに驚いたのもこの場所であった。

何世紀も使用されてきた香料街道がリーハイの時代に存在したからと言って、リーハイがどこまでその街道を利用し、どこで人の多く通る部分からあまり人の通らない道にそれればよいかを知っていたということではない。そういうわけで、リーハイは実際にリアホナを必要としていた。もちろんリアホナは旅行する時の方角の手引きにも使われたが、リーハイの家族の霊的な導きのためにも使われた。リアホナは彼らが正しい時にだけ作動した。悔い改めない時には、彼らは物理的にも霊的にも道を失った。これは私たちに多くの教訓を与える話である。

アル・ベダの近くには壮大な山がたくさんそびえている。ニーファイはそこに行って、救い主の伝道やその他時の終りに至るまでの主な歴史上の出来事について、広範かつ詳細な示現を見たものと思われる（Iニーファイ11—14章参照）。近くの山で最も高いものは、アル・ベダの北東34キロにあるヨバル・アル・ローズと呼ばれる山で、海拔2,550メートルである。

父リーハイは目の前に流れる川に、長男レーマンの名前をつけた。ニーファイは、リーハイがこの川の水が紅海の泉〔訳者注：日本語訳では「頭」と訳されている〕に注ぐのを見て、息子にこの川に関連づけて教訓を与えた、と特に記録している（Iニーファイ2：9）。これは宿营地からは水が紅海に注ぐのが見えなかったことを暗に示しているのかも知れない。アル・ベダはワジが紅海に注ぐ所から北に34キロのぼった所にある。

地図と地勢を調べた結果、「紅海の泉」という言葉の意味についてもひとつの可能性が出てきた。泉とは川の源であり、水の湧く所であり、源である。アカバ湾は紅海を東北方向に延長した地形であるので、大きな紅海に対して泉と呼ぶこともできたであろう。

父リーハイはレミュエルの谷を「堅固で不動」のものとして説明している（Iニーファイ2：10）。今日のワジ・エル・アファルは正にそのとおりである。砂地の底はがっちりした山々で輪郭がはっきり決まっている。

私たちは喜んだ。レミュエルの谷と考えられる強力な候補地を見つけたのだ。私たちはサウジアラビアのアル・ベダのオアシスに近いワジ・エル・アファルにいて特別な感慨を覚えた。

天幕

次に私たちはリーハイが3年は滞留したと推測されるこの宿营地の有様をいろいろ具体的に想像してみることにした。私たちが心中に描き出したものの内最も目立つものは天幕の存在である。イシメルの家族が合流してからは、結婚した家族にひとつずつとして、天幕が9つはあったもの

と思われる。私たちがアラビア半島の各地で見た天幕が、この地域の住民が何世紀も使ってきたものの典型的なものであるとすれば、リーハイの天幕の群れの様子を相当正確に描くことができる。事実これは自信過剰の仮説ではない。というのは、ペイト・シャアル（毛の家）は時の経過の影響を全くといってよい程受けていない、と歴史家が証言しているからである。

旧約聖書には天幕の色は「黒」く（雅歌1：15）、「やぎの毛」でできていて、中には仕切り、言いかえると「カーテン」があり（出エジプト36：14）、「天幕の入口のために…とばり」がある（出エジプト26：36）と書かれている。

私たちが訪れ、調べた「毛の家」は、長方形で長い屋根の部分があり、それは両端に向かって傾斜していた。一番小さな天幕でも9本の柱があり、長いのが中央に3本並び、短いのが3本ずつその両側にあつた。同じくやぎの毛を手織りで作ったささえ綱が、地中に打ち込まれた杭につながっていた（士師4：21参照）。天幕は皆1枚か2枚以上のカーテンによって2つもしくはそれ以上の部屋に、すなわち少なくとも男性の部屋一間と女子供の部屋一間に分かれています。

リーハイの天幕が裕福な階層を代表するものであったか、故意に並の黒い天幕を選んだか、それは知るよしもない。

一頭のらくだから年に4.5キロの毛を取ることができる。やぎから取れる量はそれよりも少ない。この毛は手で支えた紡錘で紡がれて強力な糸になる。この糸からじゅうたんのようによく、非常に重い、同時に強い、しかし目が荒く、ちくちくする織物が作られる。

「毛の家」は暑い夏には人々に涼しい影を与え、側面の仕切りを閉じると冬は暖かい部屋となる。天幕は重い。移動可能な住居であるとはいえ、父リーハイが天幕を運搬するためにらくだを必要としたことは明らかである。平均的なベドウィンの天幕は、長さ約8m、幅約4.5mである。らくだ一頭は小さな天幕をひとつ運ぶことができる。そしてもう一頭らくだがいれば、普通片方の端が地面の砂に引きずられてではあるが、天幕の支柱を運ぶことができる。族長の天幕の大きさは富に正比例しているが、材質は変わらず作り方も同じである。そして一頭のらくだで運べる大きさの部分が締めひもで結び合わされて、ひとつの大きな天幕となるように作られている。

リーハイは荒野の中を8年間も旅した。従って何か所かでしばらく留まっていたに違いなかった。レミュエルの谷はこのような長期にわたった宿营地の一つであったと思われる。もしそうであれば、ここで作物を植え、収穫をしていたであろう。リーハイはエルサレムを築いた時、「食糧」を携えていた。しかし大量の食糧、あるいは多彩な種類の食糧を持っていったとは思えない。ニーファイは「天幕を張って住」み（Iニーファイ16：6）、レミュエルの谷で「荒野に住ん」だ（Iニーファイ8：2）後で、「あらゆる種類の穀物の種子も木の実の種子もとりに集め」た（Iニーファイ8：1）と説明している。小麦も大麦もニーファイの子

孫（モーサヤ9：9）によく知られていた（モーサヤ9：9）し、らい麦はリーハイよりも前の時代からパレスチナで知られていた（イザヤ28：15）。恐らくニーファイが「あらゆる種類の穀物」と言っているのは、これらのものを指すのであろう。モルモン経はそこに登場する住民が知っていた果物としてぶどう、オリーブ、いちじくをあげている（Iニーファイ10：12、IIIニーファイ14：16）。モルモン経には出てこないが、リーハイの時代に中東で広く栽培されていた他の果物に、なつめやし、ココナツ、ざくろがある。

リーハイの居留民がレミュエルの谷に住んでいた時に上記の果物を栽培したか、あるいは購入した可能性が非常に高い。一行は農耕地帯出身であった上に、宿営地のそばには「水の流れる川」が（断続的に水が流れたとしても、作物に灌漑することができた）あったので、恐らく彼らは自分たちで作物を植え、ここに滞在した間いろいろ変化に富んだ食物を食べることができたに違いなかった。

結婚式

毎日農耕作業に従事しなければならなかったが、この谷で5つの楽しい祝い事、すなわち5つの結婚式が行なわれた。セム族の生活の中で結婚以上に家族が盛大に祝うもの、また娘が待ちこがれるものはない。結婚の日は、娘の存在が男性の存在の影を薄くする唯一の日である。砂漠では、婚礼の衣裳だけでなく、新婚夫婦のために新しい天幕も作らなければならないので、結婚のための準備は非常に労力を要する。伝統的な慣習に従えば、隣近所の人を全部祝いに招かなければならなかった。そうしなければ、その社会で受け入れられた結婚とはならなかった。

リーハイの4人の息子と、元レーバンの奴隷であったゾーラムは皆結婚適齢期に達していた。幸いイシメルの家族に同じ人数の娘がいた。イシメルに適齢期の娘が5人もいたことは、非常に珍しいことであった。というのは、まだ子供の間に婚約し、13の年で結婚する女性が多かったからである。さらに5人の娘の内一番年上の子が、元奴隷であったゾーラムと結婚したことは、もっと珍しいことである。

古代イスラエルでは、青年の父親が親戚が妻となる女性を選び、結婚の準備をするのが常であった。4人の息子に代わってリーハイがイシメルと交渉したことは、疑いの余地のないところである。もっとも交渉と言っても事前の取決めに基づいた単なる形式的なものであったかも知れない。家族のないゾーラムは、ニーファイが「私たちと一しょに住まわせてやる」（Iニーファイ4：34）と約束したので、息子のひとりとして交渉の中に含まれていたものと思われる。

イスラエルの慣習通りに行なわれていれば、交渉によって5件の婚約が成立していたはずである。普通婚約期間は男性がモーハル（贈り物）を女性の父親に納めて、娘が出て行くことの償いとした時に始まり、結婚式をもって終了した。この期間が1年を越えたことはめったになかった。婚約期間中、ふたりは互いに「夫」、「妻」と呼び、婚約に

は忠誠の誓約が含まれているものと理解されていた。

旧約聖書時代の結婚は、国や宗教の認可を必要としなかった。結婚は家族の問題であって、ふたりが互いに忠誠を誓うことを公けにし、家族、友人が祝うことによってその結婚は容認された。普通は結婚式には祝宴が伴っており、時にはそれは1週間続くこともあった。また皆がねり歩いたり、音楽や踊りもあって、活気が添えられた。5つの結婚式が同時に開かれた可能性もあるので、結婚の祝いは惜しみなく、その近くの遊牧民も祝宴に招いて盛大に行なわれたものと思われる。

南方への移動

リーハイはレミュエルの宿営地で必要なことを皆なし終えた時、天幕の入口に「珍しい細工」を施した真鍮の球を見つけた。その球には2本の針があり、荒野の中を進んで行くべき方向を指していた（Iニーファイ16：10参照）。リアホナはモルモン経の中で少なくとも5回は「羅針盤」と呼ばれている（アルマ37：38、43、44、IIニーファイ5：12、Iニーファイ18：12）が、一行の信仰とこの球に対する注意の度合に応じて作動したのであって（Iニーファイ16：28）、地球の磁力線に従って動いたのではなかった。もう一つ留意すべきことは、時々そこに何か書かれていたことである。（例えばIニーファイ16：26—27、29参照）

ソルトレーク・シティにいた時に地図を丹念に調べていて、私たちはなぜ主はこの地点でリーハイにリアホナを与えられたのだろうかと思議に思った。というのは、一行はわかりやすい香料街道を旅行してゆけばよかったからである。その時、聖典とその地方の様子を調べてみて、幾つかの考えが浮かんだ。

1. リアホナが「荒野で行くべき方向」を指す（Iニーファイ16：10）ことは、そこで海に乗り出したり、東へ山の中に分け入ったりするのではなく、南々東の方向に進み続けるべきことを、リーハイの一行に知らせるものであった。この方向は比較的安全な香料街道と符合していた。
2. しかしこの街道の幅は海岸沿いの平原の幅と同じであり、最も広い所で77キロに達した。らくだのえさを捜す隊商はもちろんこの幅全体を使ったことだろう。海岸線をもう少し下って、シェゼルを越えてから、ニーファイはリアホナが「荒野の中で一番土地が肥えたところ」（Iニーファイ16：14）を指したと具体的に書いている。これは雨でよく育った草のある所や、水の豊富な池、あるいは人があまり使っていない池のある場所を指すのであろう。
3. ニーファイが新しく木で作った弓で獲物をとりに行こうとした時に、リアホナは重要な役割を果たした。どの方角に行けばよいか尋ねたニーファイは、「山の頂きまで」導かれ、結局そこで獲物を得た。（Iニーファイ16：30—31）
4. ニーファイは一行が移動を続けている間、リアホナの指示があったことについて触れていないが、一行が「初めとほぼ同じ道筋」を進んで行った（Iニーファイ16：3）のは、明らかに特に指示がなかったためであった。

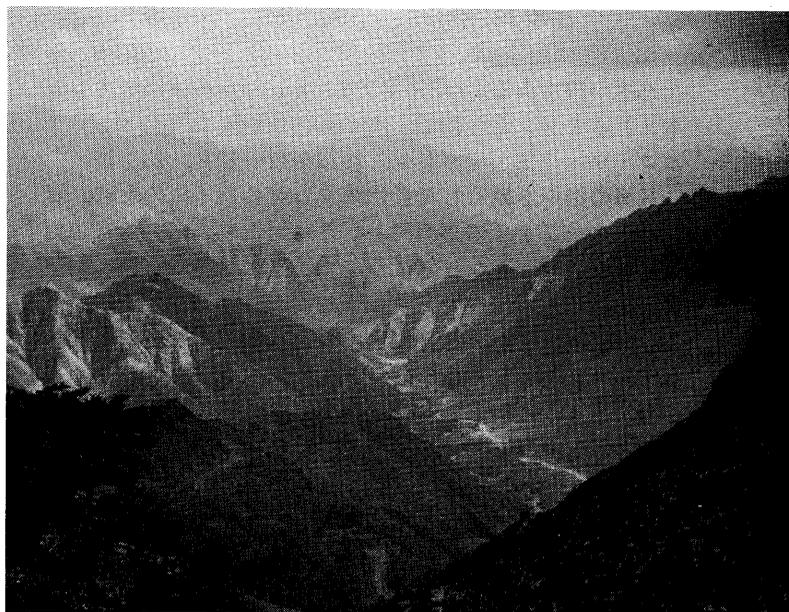
5. さらに南東に下って香料街道が分岐して、一つは南のにぎやかな町のある方へ、もう一つは東のずっと困難な道に向かっている岐路にきた時、一行はどちらに行くかを決定しなければならなかった。ここで「東」に向かうべきであると指示したのはやはりリアホナであろう。

リアホナから与えられた最初の指示に従って、リーハイはレミュエルの谷の宿営をたたむように命じた。一行はレーマンの川を越え、「四日の間」「ほぼ南南東の方角」へ進み、彼らがシェゼルと名づけた所へ来た（Iニーファイ16：13）。この旅によって、一行は紅海の沿岸を下り、ティハマと呼ばれる地に至ったものと思われる。アカバからアル・ベグまでの115キロが荒野の中の3日路であるとすれば（1日38キロ）、4日路の距離は154キロに達するであろう。これが正しいとすれば、一行は大体ワジ・アル・アズランまで来たことになる。これは長い間紅海沿岸の平原の中で重要な大きいオアシスであって、シェゼルの地であったかも知れない。この地域は東のゆるやかに隆起する山々と西の青々とした紅海にはさまれた肥沃な砂地であった。この経路はもちろん海岸沿いの古代の香料街道であって、都市で育った旅人がたどって行くのに何の問題もなかった。

この海岸沿いの平原を進んでいる間、一行が内陸に向かう余地は全くなかった。井戸が紅海沿岸にしかなかったからである。手で苦勞して掘り、石で壁を築いた井戸が沿岸全体を通して見受けられた。砂漠では伝統的に水は神から人に与えられた贈り物と見なされており、ひとり占めにしておくのではなく、飲み、喜び、どんどん客人に分け与えるべきものと考えられている。水は砂漠における命である。リーハイは家族と動物に飲ませる水なしに遠くへ旅行することはできなかった。

8年間の植物の成育期の内、何回かは作物を植えるのに使われたとする私たちの考えが正しければ、リーハイは灌漑の水も手に入れなければならなかったに違いない。私たちは街道に古代の井戸、泉、ため池をたくさん見かけた。そしていずれもそばに最近掘った井戸が並んでいた。時々、絶えず水が流れ出ている泉を見かけることもあった。そこには溝が掘られており、貴重な水を最も効果的に使えるように工夫されていた。真水の出る所で近くに人や動物のいない所を見かけたことはただの一度もなかった。

リーハイがたどったと思われる経路を、サウジアラビアの自然資源省が作った大縮尺地図で見ると、その経路全体で古い型の泉または井戸が118個あった。この地図では、何千年もさかのぼる昔に人の手で掘った井戸と、過去数十年の間に機械で掘った井戸を区別している。今日その経路上にある昔掘られた井戸が、リーハイの時代にも大体同じであったと仮定すれば、平均して井戸と井戸の間隔は29キロであり、井戸から井戸まで水のない間隔で最も長い所は、106キロであることがわかった。地図によるとアカバからサララまでの間で、水が非常に少なく、旅行が困難であると思われる部分が2箇所あった。そのひとつは、サウジアラビアのジッダからアル・クンフダまでの部分である。後



アブハ地方。リーハイはここで東に方向を転じたと思われる。ここは高い山々が連なるため、「荒野を旅して多くの艱難」（Iニーファイ17：1）に出会ったのであろう。この幅の狭いワジは、紅海からアブハ台地に通じる古代の道のひとつである。

者はイシメルの死んだネホムのリーハイの宿营地であると考えられる。ここでは水が得られる地点は平均38キロ離れていた。もうひとつの水に乏しい部分は、東に向かう部分で、サウジアラビアの（ネホムに近い）ナイランからオーマンのサララまでの道である。ここでは水は平均42キロ離れて存在した。ニーファイの記録によると、一行がとった経路の内、この2つの部分で最も厳しい苦難を受けたように見えるのは、非常に興味のあることである。（Iニーファイ16：20，17：1）

折れた弓

モルモン経はニーファイと兄弟たちが、弓、矢、石投げ器、石を使って野性の動物を殺したと告げている（Iニーファイ16：23）。現地の案内人のひとは、若い頃銃を撃つのが好きだったので、何百頭もガゼル（小型のかもしか）をしとめたと言っていた。また丘陵地帯には野性のろば、ガゼル、大かもしか、野性やぎ、はと、らいちょう、やまうずら、野性の牛、野うさぎ、あるいはやぎ、馬、ろば、らくだ、犬などの家畜として飼われる動物もいるということである。普通犬は野うさぎをつかまえるように訓練された足の速いグレーハウンド種の猟犬である。このサルキスと呼ばれる犬は遊牧民の間で人気があり、ほとんどの家庭で1匹は飼われている。リーハイの一行は恐らく食用としては考えなかったと思われるが、現地の動物誌の中に入っていたものに、狼、ジャッカル、ふくろう、蛇がいる。ユダヤの食習慣で許されていたいなご（レビ11：21—22）もこの地域にいる。ベドウィンにとっていなごはごちそうであるので、彼らはそれを干して一年中いつでも食べられるように蓄える。犬もいなごを喜んで食べる。数年に一度しか訪れない「いなごの季節」は、砂漠の住民にとってちょっとし

ジッダの造船所。アラビア船が、手工具を使って建造されている。その設計図は船大工の脳裏に描かれている。中国やザンジバル、インドへ歴史的な航海をしたのはこの大きさの船であった。(写真上)

古代の香料街道には、絵や文字の描かれた岩が方々にある。疲れた旅人が気晴らしに描いたこの落書きから、近代の考古学者は古代の貿易路をはっきり知ることができた。(写真右下)

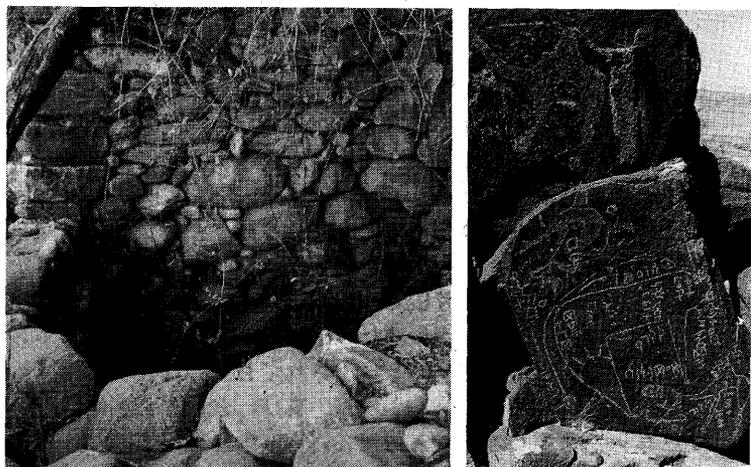
た感謝の時である。(ウィリアム・トレシー「バイオレット・ディクソンとの談話」*Aramco World Magazine* アラムコ・ワールド・マガジン、1972年11—12月、23：17)

紅海の沿岸を旅行して近代のジッダの近くに来た時、私たちはニーファイの鋼の弓が折れ、兄たちの木の弓も弾力を失ったわけがわかったように思われた。(聖書に出てくる鋼の弓については、サムエル下22：35、詩篇18：34、ヨブ20：24参照)弓が折れるという事故が起こったのは、一行が「何日も何日も」旅をし(ニーファイはIニーファイ16：15、16：17の2節で2回同じ表現を繰り返している)、しばらく休むために天幕を張った後のことであった。休むために天幕を張ったのは、女子供を伴った一行にとって自然なことであった。ニーファイによると、弓の折れたこの宿営地を出てネホムに着くまでに一行は再び「何日も何日も」旅をしているので(33節)、この宿営地はシェゼルとネホムの真中ぐらいに位置していたのかも知れない。ということは、この事故は、サウジアラビアのジッダの近くで起こったということになる。このあたりの環境は、高い気温、湿気、砂、塩の恐ろしい組合せで、その作用は鋼をも破壊する力を持っている。数カ月の内に自動車のフェンダーに穴があくのを見て私たちは胆をつぶした。3月から11月までは容赦のない暑さである。1月の後半に入っても気温は29度まで上る。湿気は一年を通じて平均約60パーセントで、15年の周期で訪れる多湿の年には、一年中平均して92%にも達する。ペンキを塗っていない金属はおよそそのような条件に耐えられない。私たちはその地方の建物にも造船所にも金属が使われているのをあまり見かけなかった。

同じことがニーファイの弓にも起こったのだろうか。さびで弱ったため、ニーファイが限度ぎりぎりまで弓を引いた時に、ぼきっと折れたのかも知れない。兄たちの弓が同じ頃に弾力を失ったのも、気象条件で説明できる。木製の弓はエルサレム周辺の乾燥した地方ではいつまでも弾力性に富み、強力であり得た。しかし紅海沿岸の湿潤な気候のもとに何年もおかされると必然的に湿気を吸収し、遂には若木のように柔らかくなったのであろう。実際私たちが知り合った人々も木製の所持品について同様の経験をしたと何度も言っている。

これはニーファイが直面した問題であった。しかし彼は新しい弓を作るための木を発見した、と記録している(Iニーファイ16：23)。われらの考古学者の友人サリム・サアドは、ジッダの周辺にはえていくぐろの木からよい弓が作れると熱烈な口調で話してくれた。この木は中東のどこにも生育し、塩気のある水でも育つ。ぎくろの木は比較的まっすぐな木で、木目が細かく、きわめてしなやかで同時に強靱な果樹である。

ジッダはリーハイの時代には恐らくほんの小さな村でしかなかったことだろう。しかし今日のジッダは人口50万の大都市である。ところがほんの25年前には、「2本の木を持っている人に」という宛名だけで、実際に手紙が配達されたものである。しかし今日は町中にたくさんの木がある。



サウジアラビアの石造りの井戸。水は砂漠の生活に欠かせない。水のある所には人が住み、水のない所には人が住めない。旅をするのも危険である。ベドウィンは井戸から井戸へと渡り歩く。リーハイも同様であったと思われる。(写真左下)

ジッダの造船所では、人々が手で厚板をけずり、手動の穴あけ機やのこぎり、手おの、おのを使って竜骨や船首の形を作っているのを見た。また硬材に錬鉄のきり先をつけた手動の穴あけ機を首尾よく購入することができた。これは弓形の道具に縛ってある革ひもを巻きつけて回転させて使うものであった。私たち現代人の目から見れば、原始的で、扱いにくい道具のように思われたが、目の前であっという間に硬材の厚板に3つも穴をあけるのを目撃した。

私たちは沿岸北部のキャンプの造船所で古い型ののこぎりが使われているのを見て、やはり胸を踊らせた。鉄製の刃は木枠の中にぴんと張られていた。その作りは、刃の両端の枠木を一本の紐で結び、その紐を通してある棒をねじって刃をぴんと張っているものであった。これも一見原始的に見えたが、驚くほど容易に厚い板材をさっと切ってしまった。

私たちはニーファイが自分の造船について、「人の知ったやり方で材木を加工することもなく」と説明していたのを思い出した(Iニーファイ18：2)。沿岸の造船所でニーファイが造船について多くの知識を得たことは明らかである。それで、主の方法に従って建造したニーファイは、自分が

サララの浜辺の小舟。筆者は、ニーファイが船を建造して、アラビ
▼ア海に進水したのは、この浜辺であると考えている。



▲中東のいちじくの木。ヨーロッパやアメリカに見られる広葉樹とは異なり、少量の水と、多くの太陽光線と高温によって生育し、実を結ぶ。

「人の方法」とは違った方法で造ったことを知っていたのである。

私たちは船を造る人々の技術に驚嘆した。彼らは船の肋骨を形作る時、求める曲線に自然にまがる木の太枝を慎重に選んで、小さな手斧で削りながら正確な形にしていくのであった。彼らは作業をする時足と足の指を使いながら木を支えて、木の自然の曲線を保持した。私たちは紅海を見つめながら、ニーファイがもう少し詳細に書いてくれたらどんなによかったらと思うものである。

食物

旅をしながら、私たちは食物についての情報をたくさん集めた。古代の砂漠の住民は今日のベドウィンが食べている食物と同じものを食べていたことは明らかである。私たちはイスラエルの博物館で、少なくとも紀元前1千年にさかのぼる昔に当地で収穫された産物を見た。その中に大麦、小麦、にんにくの球茎、なつめやしの種、ひら豆、オリーブ、堅果、どんぐりが含まれていた。これらが皆リーハイの時代に普通に食用として用いられたことは確実である。上の産物は今日の生活の必需品であるが、古代においても

同じであった。中東の歴史家でもある私たちの友人は、砂漠における生活様式の主な部分は何世紀もあまり変わっていないと何度も語っていた。直接アラビア半島を訪れた古代の著述家は皆例外なく、オアシス、村々が代々存続したこと、リーハイが通ったと思われる街道全体を通じて遊牧民族が移動したことを記録している。

食物の名前を集めていて、私たちはらくだを見過ぎしにできないことに気がついた。砂漠に住む者にとってらくだは「砂漠の船」以上の存在である。らくだは生活様式を表わすもの、神から与えられた特別な贈り物であり、非常に重要な動物であって、らくだの無数の種類、状態、成育過程を表現するアラビア語が700以上もある。らくだの寿命は40年から50年で、雌のらくだは子を産んだあと4年も乳を分泌する。ベドウィンはらくだのミルクとなつめやししか食べるものがなくても、何カ月も何年も生きることができ。らくだのミルクはきわめて貴重なものであるので、らくだの子供にも連続して飲ませる期間は6週間くらいである。その後は母らくだの乳房を皮の袋でおおって、子供には日に1回か2回しか吸わせない。そうすると、子供のらくだは間もなく乳離れする。

サウジアラビアのアブハに住むシェイク・ヘルワン・ハブタルによると、人ひとりを砂漠で養うには4頭のらくだがいると言う。そこでもしリーハイが全くらくだの世話にだけ頼って生きようとすれば、少なくとも20人はいたので、その一行を養うのに相当数のらくだを要したはずである。しかし一行がこのベドウィンの生き方に完全に従ったとは考えられない。というのは、野性の動物を狩り、あちこちの居住地で作物を植えたと思われるからである。

ニーファイが「生の肉」(Iニーファイ17:2)を食べたと書いているのを読んで私たちは当惑し、不快感を覚えた。だから私たちの友人アンギー・チュクリからこの同じ生肉のエジプトのごちそうをふるまわれて、カイロでこれを食べた時は驚いてしまった。私たちが想像したように血のしたたるものではなかった。にんにくや他の調味料で味つけがされていた。屋外で日光にあてて、色が褐色になるまで乾燥させたものであった。しかし内側はピンクがかった赤で、かむと柔らかく、薫製肉のような固さはなかった。もちろんにんにくのおいがとても強かった。しかし味はよく、生肉を食べることは大変つらいことであるという考えを持たなくなった。後に私たちはエジプト、ヨルダン、サウジアラビアの市場で生肉を売っているのを目撃した。ポローニャソーセージのように大きなかたまりで、アンギーからふるまわれた肉とほぼ同じ味がつけられていた。特に私たちに興味があったのは、アラブの人たちがこれを「生肉」を意味するバステルマという名前と呼んでいたことである。これはニーファイの使った言葉が単に記述的なものではなく、固有名であったのではないかという思いを抱かせる。一行が紅海沿岸からバウンテフルまで内陸の危険な道を行く間、火を使わなくてもよいように、主が彼らの食物を「おいしく」されたのは、上のような方法または

同様の方法によったのだろうか。

ネホム

リーハイの移民団は紅海の近くをずっと南へ旅し、最後に「ネホムと言うところ」に天幕を張ったとニーファイは記している（Iニーファイ16：34）。一行が再び移動を開始した時には、「また荒野の中を旅して行ったが、この時からはほぼ東の方へ進んで行った。」（Iニーファイ17：1）香料街道は北緯19度で東に折れる。ネホムがあったと思われる所はここである。

北緯19度の近くにある今日の村は、サウジアラビアのアル・クンフダである。イシメルはこの近くで埋葬されたと思われる。従って、私たちは当然のことながら、この辺りの人々の葬儀と埋葬の慣習を観察することにした。

ネホムがあったと思われる地点から東を向くと、紅海の海岸沿いに高くけわしい山脈が連続し、海の高さから急に3,000メートルもの高さに達する地勢であった。古代の香料街道のひとつは大体この辺りで海岸からそれ、ワジ・アバビシ（図2参照）を通り山々の峰を越えて、スダの村に達している。そして他の街道とアブハの隊商の町で合流する。この町は標高1,800メートルでサウジアラビアのこの地方きっての都市である。

この辺りの地勢を見ても、リーハイがこの近くで東に向きを変えたことを納得することができる。ほかに街道がないことが事実上この見方を保証している。岩に刻まれた文字や絵が、強い日光や風にさらされながら残っていることも、隊商が何百年もここを通過したことを証言している。

私たちはアブハで並はずれた人物に出会った。しかも丁度そのような人を必要としていた時であった。アメリカの大学で政治学と経済学の両分野で修士号を取ったヘルワン・ハブタルは、私たちを自分の家に案内し、そこで彼の家系を、22代さかのぼって復唱してくれた。その夜丁度彼を訪

サララに生育するいちじくの木。サララはアラビア海岸沿いで材木として使える大木を産する唯一の土地である。



ねていた3人の人も興味をそそられてそれぞれ13代ほどさかのぼって系図を朗唱してくれた。それをテープに取りたいと言うと彼らは喜んだ。

市場の開く火曜日にアブハにいたことは幸運であった。市場が火曜日に開かれることは、もう何百年も昔からの慣習で、いつから始まったのかハブタル氏も知らなかった。蜂蜜を売る場所、香料を扱う場所、ほかに没薬、果物、野菜、布、衣服、ろば、羊、らくだを売る場所がそれぞれあった。

私たちはまず香料と没薬を売っている所に注目した。香料は小指の先ほどの大きさの金色の固まりで入荷する。他方没薬は赤みがかった褐色をしており、岩のような固まりあるいは削りくずの姿で入荷する。香料は比較的安価であった（450グラム数ドル）が、没薬は「薬品」として使用されるので、香料より高価であった。生まれたばかりの赤ちゃんは皆水にとかした没薬を味わわされ、人生には辛苦が待っていることを警告される。また、病気の子供のそばでつり香炉で没薬をたくと、早く回復すると信じられている。エルサレムにいた45歳になるひとりのアラブ人は、子供の時病気にかかると没薬をたいた皿の上を跳び越すように母親から言われたことを話してくれた。これで私たちは博士たちが赤児イエスに没薬を持ってきた理由と思われる解釈の一つを得た。それはマリヤが赤児を守るのを助けるためだったのである。

前に触れたように（聖徒の道、1977年7月p.321）、リーハイは当時も今も人口密度の高いイエーメンとハドラマウトの峡谷を避けて進んだ。今わかる限りでは、ミネア人が紀元前1,200年に最初にここに王国を築いた。ミネア人の後に当地を継いだのは、サベエ人で、リーハイの時代にここを治めていた。

リーハイがイエーメンとハドラマウトを通らなかったことを示す証拠がほかにもある。ニーファイはこの間生の肉を食べ、火は一切使わず、「多くの艱難をふみこえて」進み、ついに海岸沿いの肥沃な地に着いたと記している（Iニーファイ17：1-5参照）。もし彼らが、さらに南下してイエーメンを通る香料街道の幹線の方を旅行していれば、ほとんどいつも肥沃な地方を通過していたことだろう。

リーハイとその一行は、そこを通らずにほぼ東に向かい（聖徒の道、7月号p.321）、南側に行くより短い、大無人地帯のただ中を走る、香料街道の中でも最も困難な部分を旅したのだった。これは地上最大の砂漠である。香料街道はこの大砂漠の南端を走っている。私たちは自動車ではなく飛行機でこの地域の一部を通った。たまに草や灌木が見られるだけで、あとは木のない、岩だらけの月面のように不毛な土地であった。地震で割れ、風雨の浸食作用を受けた岩が、荒れたワジに散乱していた。ワジのあちこちに水たまりがあったり、水の流れているのが見えたことから推測して、私たちは雷雨のあったすぐあとを飛んだのに違いない。

（次号へ続く）

教 会の標準聖典に種々の運動競技に触れた聖句があることを知っても、皆さんの多くはさして驚きはしないだろう。教会の卓越した教師のひとりであるロバート・マシューズの研究は、使徒パウロがその手紙の中で何度か使っている運動用語の数々に私たちの注意を引くものである。彼はその著書の序文で次のように論評している。

「コリントでは（当然その他の町でも）2年毎に、徒歩競争、ボクシング、跳躍、レスリング、やり投げ、円盤投げ、戦車競争など、ギリシャ人の愛好するあらゆるスポーツが行なわれていた。賞はただの花冠や葉冠、松の小枝、つたの葉に過ぎなかったが、賞を得た者は故郷の町で大いなる誉れを受け、歓迎された。また、これらの行事に参加する資格を得、実際に参加するためには、苛酷なまでの厳しい訓練と豊富な練習量が要求された。競技をする者

は、勝利者となるために、単なる楽しみ以上に、絶えず猛烈な努力を払うことによって自らを鍛練しなければならなかったのである。パウロは福音を宣べ伝えるに当たり、上に述べたような運動競技に幾つか触れている。パウロはボクサー、闘士、競走者およびその走路について述べ、また獣類と格闘する剣闘士、勝利者の冠、目標、賞、厳しい訓練、適切なコンディション、出発係、審判者、とりわけ競技に勝つという意志について述べている。無論、初期のキリスト教改宗者はこれらの行事や競技に通じていた。そこでパウロは、運動用語を使って聴衆に福音を生活に取り入れるよう勧め、とりわけ自己訓練と自制の大切さを示した。」

マシューズ兄弟は続いて、パウロは当時のギリシャの大競技場のどこかに立って、マラソン選手がまどっていたよろいをはずす様をじっと見ていたと

思われると述べている。当時、マラソン選手はよろいをつけたまま練習し、本番の競争を前にはずすのが習わしであった。スターターの合図で、選手は一勢に一路42.195キロの道のりに挑んだ。近隣の村々を走り抜け、田舎道をひたすら走り、競技場まで帰ってくるのである。そして競争の最後に、審判員が勝利者に賞を授けるのであった。パウロは恐らくこのような競争を見ていて、人生というものを深く見通したのであろう。パウロは次のように述べている。

「いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競争を、耐え忍んで走り抜こうではないか。

信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。」（ヘブル12：1—2）

パウロは、スポーツは訓練を通じて最も大切なものすなわち勝つという意志を与えるものであると理解していた。パウロは、競技の優勝者が勝利の栄冠を頭にするのを目にした。また、彼らが授かる花冠を見た。そしてさらにパウロ自身がいつか勝利を得、最も大いなる冠すなわち永遠の生命の冠を授かるのを見た。パウロは競技の優勝者たちが勝利を得るためにいかに努力を積んだか、またいかに熱心に元気よく競技に臨んだか知っていた。そしてパウロは、キリスト教徒も彼らと同じであることを理解していた。例をあげてのパウロのこの説明は、それが宗教的な



人生の競技

七十人第一定員会会長
ポール・H・ダン

意味を持っていることから特にふさわしいものである。イエスのようにパウロもまた、日常の出来事を使って目に見るような説明をする才に長けていた。パウロは、福音の場合も運動競技と同様、勝利の代価は不断の努力と自己訓練と全くの献身とにかかっていることを指摘している。

彼の手紙から引用してみよう。これは、パウロがコリントの人々に書き送ったものである。

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りをするが、賞を得る者はひとりだけである。(無論、コリントの人々はこのことを理解しただろう。) あなたがたも、賞を得るように走りなさい。」パウロは、すべて競技をする者は何事にも節制をすと言っている。彼らはわずかばかりの小枝や花の朽ちる冠を得るためにそうするが、私は朽ちない冠を得るためにそうする。従って、私はパウロが言うように目標のないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分の体を打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない(Ⅰコリント9:24-27参照)。

次に、友人のテモテに宛てた言葉に注目しよう。パウロはこう書いている。「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。」(Ⅱテモテ4:7-8)パウロはまたテモテに、競技をする者は、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られないとも言っている(Ⅱテモテ2:5参照)。これは、短い言葉の中に重大な意味を持つ偉大な説教である。人生は数々の興味ある規則および規定から成っており、競技の規則および規定に従って競技をして初めて人は勝利者になれるのである。

世はあなた方の持てるものを必要としている

私たちがこの地上に送られてきたの

は、非常に大切な競技をするためであると言ってもよい。しかしこの競技には素晴らしい規則と規定が伴っている。私は、常識と分別があり、コーチの言葉に従うことのできる皆さんに、私たちにはスペンサー・W・キンボールという偉大なヘッドコーチがいることを証申し上げる。皆さんは彼の言葉はもちろん、十二使徒定員会ならびにすべての教会幹部、監督、ステーク部長、指導者、素晴らしい教師たちの言葉を耳にしてきた。皆さんは彼らがこぞって皆さんを欺くために選ばれていると思っただろうか。それとも、皆さんがよく規則を守りながら人生の計画に従うことができるように、この時期に、皆さんを助けるために彼らと与えられていると考えているだろうか。私は後者であると思う。そこで、私は人生の計画という競技の選手である皆さんに、賢明な勧告に聞き従うようチャレンジするものである。皆さんは人生、いふならば人生の競技で、次のふたつの事柄を行なわなければならない。

(1)世が皆さんに挑んでいく様々のチャレンジに対処できるよう自らを備え、
(2)その準備ができたならば、この世界を住み心地のよい場所とするために、自分の持っているものを世の人々に分かち合わなければならない。

私たちの教会は伝道の教会である。皆さんも御存知のように、聖典には天父が御子を通じて下された勧告が満ちあふれている。その中から1、2例をあげてみよう。どれも私たちがよく知っていることである。教義と聖約の64章には、予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示が記されている。この啓示は教会が組織されてから間もない、1831年9月に与えられたものである。当時教会員の数は多くなかった。そして彼らには分かち、与え、教えるという実に重大な責任があった。主は予言者に次のように言うおられる。

「この故に汝らは主の代理人なれば主の用向を有てる者なり。されば、何事にまれ主の意に従いて汝らの為すところはすなわち主の業務なり。

主は聖徒らがシオンの地に於てゆずりを得んために、末の世に於て汝らを

置きて彼らの必要な物を与えしむ。」
(教義と聖約64:29-30)

ここで皆さんにひとつお尋ねしたい。もし私たちがゆずりを与えなかったなら、彼らはどのようにしてそれを得るだろうか。また、喜んで積極的に与える場合はどうだろうか。主は続けてこう語っておられる。

「見よ、主われ汝らに述ぶ。されば、わが言は確にして彼らのゆずりを受くるは過ちなし。

されどすべてのことは、その時節至りて成らざるべからず。

この故に善を為すにうむことなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。

見よ、主は真心と喜びて事に従う精神とを求む。喜びて従順に従う者たちは、この末の世に於てシオンの地の善きものを食わん。」(教義と聖約64:31-34)

個人的なことで申し訳ないが、このことに関してひとつの経験を話させていただきたい。話は1940年代にさかのぼる。私の弟はニューイングランドに伝道に召され、(事の顛末は関係ないのでそれには触れない)ノバスコシアのケントビルという小さな町へ派遣された。伝道期間中の大半を弟はその地で過ごした。しかしバプテスマの数は多くなかった。そのため今でも宣教師たちの間に見受けられるように、弟は挫折感を抱いて家に帰ってきた。このような時、結果の思わしくなかった弟に兄がどうするかは言うまでもないだろう。御多分にもれず、私も弟に対して彼の伝道が失敗だったことをいつも思い出させていた。ところがそれから20年後、弟が伝道に召されたほぼ同じ頃、兄の私は同じ伝道部を管理するように召されたのである。赴任して最初の地方部大会がノバスコシアのハリファックスで開かれた時だった。最初の集会が終わった後、ひとりの小柄な婦人が私のところに来て、こう言った。「ダン長老、ダン長老。デビッドという名前のご兄弟はいらっしゃいませんか。」

「ええ、おりますが。」

「彼はニューイングランドで伝道な

さいましたか。」

「ええ、しましたよ。」

すると彼女はバッグから写真を取り出し、その中の1枚を私に見せて、こう言った。「この人ですか。」

「20年前のですね。そうです、私の弟です。」

「よかったわ。それで今どちらに？」

「南カリフォルニアに住んでいます」

「そうですか。実は私、弟さんと連絡を取りたいのです。私をこの教会に導いて下さったのはあの方なんです。」

「ちょっと待って下さい。何かのお間違いじゃありませんか。私の弟は、ひとりも教会に、導かなかったんですよ。」

「いいえ、それは違いますわ。こう言うのも何ですけどー」そう言うと、彼女は6人の人々を呼んだ。皆、多くの家族を持ち、ハリファックス地方部の主力となっている人々であった。「この方たちは皆、あなたの弟さんのお陰で教会に導かれたのです。主が弟さんをこの地に送って下さったことに感謝していますわ。」

小さなことから偉大なことが起こるのである。

あなたの隣人に教えなさい

もうひとつの例をお話させていただきたい。教義と聖約88章で主は何と言っておられるだろうか。主は、「その隣人を警むる責任あり」（教義と聖約88：81）というきわめて簡潔な言葉で述べておられる。この教会の会員であるとなしとを問わず、皆さんの隣人は何であれ警告を必要としている。

しばらく前のことである。私の知人が重い病いに倒れた時だった。私は何か助けになることがあればと、ソルトレーク・シティーにあるベテランズ病院に駆けつけた。彼には幾つか問題があった。彼は積極的な教会員ではなかった。皆さんの身近にも彼のような教会員がいるに違いない。

私が病室に入っていった時、彼は驚いて言った。「どうして私がここにいらることがわかったんですか？」

「主が教えて下さったんですよ。」

彼は血液状態の不良が原因で、非常

に衰弱していた。年のせいで衰弱は一段とひどかった。彼は足首のひどい痛みにも悩まされていた。私が彼を病室に見舞った時、彼はちょうど夕食をとっていたので、私はベッドの端に腰かけて話をした。「少し足でもマッサージしましょうか」そして私は彼の足をマッサージしながら話を続けた。「立ち入ったことですが聞いてもいいですか。突然こんなことになって、驚いたでしょう。監督はあなたがここに入院していることを知っていますか？ 監督に話してもいいですか？ 祝福を受けたいかがですか？」彼はすべて了承してうなずいた。「それじゃ、信じてるんですね？」

「いいや。」

「私のことは信じて下さいますか？」

「信じてます。」

「じゃ、信じるってどういうことですか？」

「わかりません。」

そこで、私はベッドに腰をかけたまま、彼にいろいろと教えた。

ほとんどの人は教えられていないために知らないし、理解していないのである。私は彼に信仰について簡潔に話した。福音の第一原則とは何か。信仰、悔い改め、バプテスマ、それに聖霊の賜について。ここで、信仰というものを振り返ってみよう。それは何の信仰だろうか。言うまでもなく、主イエス・キリストを信じる信仰である。私たちは時々その信仰をないがしろにしてしまう。私は彼にそうした原則を教えた。彼がそれまで耳にしたことのないことだった。しかし彼は教会員の子供として生まれ、当時62歳になっていたのである。

もちろん私は彼を最初に見舞った時、同室にはかに4人の男性の患者がいることに気づいていた。プライバシーのない相部屋だったのである。私が彼に教えている時も（ふたりだけの会話で、全員に聞こえるような大きな声で話したわけではないが）、他の患者たちは私の話に耳を澄ましていた。私が友人の頭に手を按こうと、立ちあがり、準備にとりかかった時だった。私はみだりに促されるままに、病床に伏してい

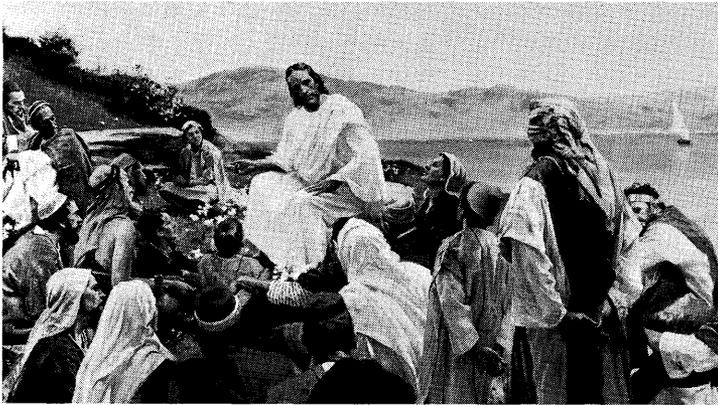
る他の患者にこう言った。「少しお話してもよろしいでしょうか？」すると、全員がベッドから起き上がった。「もうお気づきのことと思いますが、私は皆さんと同じように病気で伏している友人を見舞いに来ています。私は彼のホームティーチャーなんです。私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員です。モルモンです。皆さんと知り合う機会がありませんでしたので、皆さんがどんな信仰を持っておられるのかわかりませんが、霊的な面で互いに助け合うことはできると思います。今夜は、そのことを実行しようと思って来ました。今から私は友人に特別な祝福を与えます。」それから私はその祝福について簡単に話し、こう言った。「皆さんがこの祝福を信じる信じないは御自由です。ただ、私が儀式を行なう少しの間、敬虔にしてい下さればと思います。」全員ベッドに座ったままだった。私は友人の頭に手を按き、祝福を授けた。私たちふたりはみたまを感じ、22年間教会に集っていなかった友人は恥ずかしさも忘れて涙を流していた。祝福を授け終わって、私たちは互いに抱き合った。私は言った。「ところで、もう一度お尋ねしますが、私のしたことはお気にさわりませんでしたか？」

「ダン兄弟、とんでもない。今は私の人生で一番神聖な時です。どうもありがとうございます。」私が帰ろうとすると、ほかの4人の患者が私に祝福を求めた。そのうちふたりは教会員ではなかった。さて、末日聖徒である皆さんは、自分がどんな人間であっても気後れする必要はない。福音を教える機会はいつでも私たちにあり、この最も貴重な贈り物を分かち合うことができるのである。私たちがこの偉大なビジョンを理解し、またその大切さを悟ることができるよう祈るものである。

皆さんは、この地上に送られてきた使命を果たす可能性を自らの内に宿しておられる。最後に、それは大変な競争であることを覚えていただきたい。人生という競技において、規定に従って競技するならば勝利を得るであろう。また自らと主を知り、福音を分かち合うであろう。

主の羊を養う

セオ・E・マキーン



美食は大いに食欲をそそるものである。しかし、腹をすかせていた私の少年時代には、学校から飛んで帰る私を待っている、バターのとろけた温かい焼きたての手作りパンにまさるものはなかった。私の母はどうすれば子供たちに最も栄養をとらせることができるかをよく知っていた。母は私たちのことを理解し、愛し、ごく簡単な、しかも一番良い方法で助けてくれた。

あとになって、主がご自分や福音のことを「命のパン」(ヨハネ6:32-35参照)と言われたわけが、私にはすんなり理解できた。「何世紀もの間……主の教えは飾りけなく、胸に直接迫るものとして存続してきた。そのように計画されていたからである」(ボイド・K・パッカー長老 *Teach Ye Diligently* 「熱心に教えよ」 p.19)という言葉も容易に理解できた。

救い主のように教える

福音の教師、あるいは将来教師になるはずの私たちにとって、ひとつの大きなチャレンジは、救い主のように単純明快に教える能力を身につけることである。「聖徒の道」1977年4月号p.240の表「福音の教授と学習」を参照)

救い主の教え方には、込み入ったことや難かしいことがひとつもない。ボイド・K・パッカー長老はこう言っている。

「私たちは心の中で、救い主が導きと恵みを施しておられた時代に戻ることができる。救い主が教えておられることによく注意を払うことができる。救い主の教え方をよく観察して、主の羊を養いなさいと命じられた時に、救い主と同じように行なうこともできる。」(「熱心に教えよ」 p.19)

いろいろな教授法や教材や手引きを使って教えることができるが、「結局は、(1)講義 (2)質疑応答 (3)問答による復誦が教え方の基本である。」(同上, p.224)

講義では、教師が福音の基本的な真理を説明し、生徒が

聞く。質疑応答では、生徒はそれらの真理をさらに明確に、深く理解する。問答による復誦では、生徒が学んだ真理を復習し、口述し、心に刻み込む。

講義

講義は、無味乾燥な長い説教と考えるてはならない。霊を喜びさせ、心を満足させるものでなければならない。

私たちが常に教え方の模範と仰ぐ救い主は、純粋な命のパンだけを提供しておられた。いつでもパンが与えられたが、その量は一人一人違っていた。真理に対する理解度や従おうとする真剣さで、どのようなパンになるかがおよそ決まったが、パンはいつも簡素で整然とし、霊的に栄養十分であった。

パッカー長老は語っている。「イエスの教え方を研究すると、特にひとつの原則をよく使って教えておられることに気がつく。この原則を理解して利用すれば、イエスの教え方から学ぶことは多いが、中でも宗教の教師として自分自身の改善を図ることができるであろう。教育者たちはそれを類化の原則と呼んでいる。

類化とは、『過去の経験をもとにして新しい概念を理解すること』である。これは、正直、敬虔、愛など、教えるにくいことは、生徒の経験を取り上げて、生徒がすでに知っていることから話を始めるということである。そうすれば、知ってほしいことに引き比べたり、移し変えたりして、意味を理解させることができる。」(同上, p.20)

イエスはよく、「天国はこのようなものである」という言葉で教えるを説き起こされた。そして、天国を人々がよく知っている何かと比べるのである。(この原則の詳細については、「類化の原則によって教える」[p.383]を参照)

類化の原則を多少変形したものが、視覚教材の利用である。救い主が用いられたのは、ほとんどが人々の周囲に自然に存在するものであった。いちじくの木、貨幣、野の花などは、イエスが話しておられるその場で目にするのでできるものであった。

パッカー長老が勧めている次のことは、視覚教材、それも特に人工の視覚教材を使う時に良い参考となる。

「視覚教材は控え目に使うように気をつけなさい。ごく単純で、簡単に手に入るものが最高の視覚教材である。いろいろ考えてみると、黒板ほど良い教材はないと思う。あれほど有効な教材はまれであろう。まず、黒板は手軽に使える。次にどこでも使える。世界中どこでも黒板は手に入る。大切なレッスンを口述しながら、黒板を使って生徒たちの目を捕えることができる。話しながら、黒板にその間生徒の注意を集中させて、概念を理解させる。ただし、あまりに興味を引きすぎると、視覚教材の方に目が向いて、レッスンがおろそかになる。

書いた言葉を視覚教材にすることで一番多い失敗は、目で見ることと耳で聞くことが一致せずちぐはぐになることである。これは実に多く、正しく黒板が使われていることの方が珍しい。黒板に書いたり、表にあらかじめ書いて

おいたり、フランネルボードに張ったり、プロジェクターを使って映写したりする時には、生徒たちの目に入ることと耳に入ることが同時でなければならない。

教室で使う視聴覚教材は、使い方次第でプラスにもなればマイナスにもなる。それはちょうど、料理に使う香辛料のようなものである。レッスンをおもしろくするには、惜しみ惜しみ使うことである。」「(熱心に教えよ」 pp. 224—225)

質疑応答

質疑応答も、救い主が使われた大切な教え方である。しかし、救い主は独特な方法でそれを用いられた。通常、生徒に自分で学ばせたのである。質問の内容そのものと生徒が向きあう形で、受け答えをされた。そのようにして、生徒は真理の基本原則を内省によって洞察し、理解したのである。

救い主は、「われは汝らを世の塩のごとき者とすれど、塩もし塩気を失わば、何を以て世に塩の味をつくることを得べきか」(Ⅲニ一ファイ12:13)、「何故に兄弟の目にある小さきほこりを見れど、同時に己れの目にある梁のことを考えざるか」(Ⅲニ一ファイ14:3)などの質問をされた。このような質問は、聞き手に福音をはっきりと理解させ、自分と引き比べさせる救い主独特の教え方である。

救い主は、質問に別の質問で答えることもよくなされた。救い主の質問に答えると、自分がした質問の答えになるのである。

「あなたも、同じ教え方ができる。生徒が質問をしてきたら……自分で返事をしてしまわず、話し合いの中から生徒自身に答えを見つけさせるようにしなさい。教師がさっさと答えてしまうことは何とたやすいことだろう。しかしそうすることは、活発なクラス討論の口火になったかもしれない話し合いの芽をつんでしまうことになる。

賢明な教師は、『おもしろい質問だね。みんなはどう思う?』とか、『この質問に答えられる人はいるかい?』と、巧みに話をもちかける。

簡単な言葉のやり取りを行えば、生徒全員が参加できて、退屈せず、レッスンに心を開いてくれる。」「(熱心に教えよ」 pp. 55—56)

復誦

救い主はしばしば、聞き手にすでに知っている真理を思い出させたり繰り返させたりして、相手の理解を新たにされた。(ルカ10:36—37はその一例である。)そして真理を復誦したあとで、たいてい「あなたも行って同じようにしなさい」(ルカ10:37)と言っておられる。

これまで、救い主がいかに簡単に、いかにわかりやすく、しかも効果的に教えられたか、また御父の羊を命のパンでどのように養われたかを見てきた。私たちが行って同じようにしようではないか。



類化の原則に よって教える

ボイド・K・バックナー

イエスの教え方を研究すると、特にひとつの原則をよく使って教えておられることに気がつく。この原則を理解して利用すれば、イエスの教え方から学ぶことは多いが、中でも宗教の教師として自分自身の改善を図ることができるであろう。教育者たちはそれを「類化の原則」と呼んでいる。

注：ボイド・K・バックナー著、*Teach Ye Diligently*「熱心に教えよ」デザレト出版社、許可転載

過去の経験をもとにして理解する

類化とは、「過去の経験をもとにして新しい概念を理解すること」である。これは、正直、敬虔、愛など、教えるにくいことは、生徒の経験を取りあげて、生徒がすでに知っていることから話を始めるということである。そうすれば、知ってほしいことに引き比べたり、移し変えたりして、意味を理解させることができる。

イエスは実にこの方法に習熟しておられた。イエスがこの原則をどのように用いられたかを調べ、なぜそのように頻繁にこの原則が使われたのかを知れば、家族や教会で上手に教えたいと願っている人にとって大きな助けとなるに違いない。……

有形のものを使って無形のことを教える

もしも信仰を、有形のものや測ることのできるもので生徒が知っている何かになぞらえるならば、教えることはずっと簡単になる。言葉でその説明をし、話を作ることができる。また、それを計ることも、絵を描くことさえもできる。スライドにしたり、フランネルボードを使ったり、彩色をほどこしたりなど、具体的なものを使いながら抽象的なレッスンをすることができる。概して生徒たちは知らないことよりも知っていることの方に興味を持つものである。従ってそのようにすれば生徒の側に立った授業ができる。

アルファベットの文字を並べて言葉にすると、有形の世界に存在する物を象徴するようになる。本を開けば、そのような象徴がびっしり埋まっていて、文章を読むと、それにつれて象徴の表わしている物が理解できる。それと同じように、私たちがすでに知っている平凡な事柄で、無形の概念を表わすこともできる。信仰や愛、慈悲、従順といった事柄を表わす象徴を「読む」ことができれば、そのよう

に象徴されていることを「理解」もできる。

それがイエスの教え方である。私たちはだれでもそのような教え方を身につけることができる。イエスのように教えることができるようになれば、私たちは自分の子供や大勢の天父の子供たちに、「理解する必要がある……神の王国に就けるすべての事」(教義と聖約88:78)を教えることができる。(第5章「類化」pp.26—27)

信仰やその他抽象的な概念を教えやすい具体的な別の物に置き換えるよい方法がある。公式といってもよい。その方法は教師、それも宗教の教師に非常に役立つ。また両親が難しいことを子供に教えるのにも役立つであろう。

一見して、その方法はあまりに簡単すぎて、効果が疑わしいかもしれない。しかし、少し研究して実際に応用を始めると、非常に役立つことがわかる。

この教え方は新約聖書から来ているものである。またイエスは教師として、福音の無形で抽象的な概念を無学の群衆に教えられたことも承知してほしい。イエスは信仰や愛、兄弟愛、悔い改めについて教えるのに、描象的な概念を弟子たちがよく知っているありふれた物になぞらえる方法を使われた。それが類化であり、次にあげるのが公式である。

_____は_____のようなものである。

初めの空所には教えようと思う概念を入れる。例えば、ここに「信仰」と書くとする。

信 仰 は _____ のようなものである。

次に想像力を働かせて、信仰になぞらえるものを生徒が知っている有形の物の中から考え出す。身近なありふれたものであればあるほどよい。例えばこのように信仰は種のようなものである。信仰は本当に種のようなものである。少なくともアルマはそう考えた。

「今、神の御言葉を種子になぞらえて話すと、あなたたちが一つの種子を自分の心の中に蒔くとき、もしもその種子が真理の種子すなわち善い種子であって、あなたたちが不信心の心でこの種子を抜きとったり、主の『みたま』に逆らったりすることがなければ種子は次第に胸の中でふくれ始めるであろう。そこで、あなたたちは種子がふくれ始めることを感ずると、次のように思う。すなわち、これはまことに善い種子、善い言葉に違ひなく、私の心を大きく開き、私の理解力を増し、私はようやく好い味を感ずると。

ごらん、このようにしてあなたたちの信仰と言うものが増すではないか。さよう、増すけれどもまだ完全に知ると言うほどではない。」(アルマ32:28—29)

信仰を生徒の知っている具体的な物になぞらえたとする、それは形を持った物となる。信仰は種になぞらえることができる。イエスは次のようにも言っておられる。「よく言い聞かせておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山にむかって『ここからあそこに移れ』と言えば、移るであろう。このように、あなたがたにできない事は、何もないであろう。」(マタイ17:20) イエスは山を比較に使って大きさを提起し、教えをもっとわかりやすく

印象的なものにされた。

信仰を別の具体的な物になぞらえると、大きさを計ったり、形を述べたり、描写したりできる。言葉で大きさや形や色や手ざわりの感触を言うことができる。また黒板にその絵を書いたり、写真を使ったり、スライドやフランネルボードに張る絵を作ったりできる。実際に野菜の種や果実の種をレッスンに使うことができる。

容器に何かの種をまかせ、水をやる種とやらない種で、アルマの言ったように信仰は養わなければならないことを教えるのもよい。

このような比較を使うと、生徒は信仰がどのようなものかを容易に認識し始め、福音の原則をよく理解するようになるであろう。

福音を教えるのに不可欠な類化の原則

信仰、希望、愛、敬虔というような抽象的な概念を教える時に、類化の原則は有効である。小さい子供に教えるのにも、非常に効果的な意義のある教え方である。この原則を知れば、家庭や教会で教えている教師たちの大きな力となる。これを上手に教えることができるなら、諸々の徳を中途半端につまずきながら教えることもない。このひとつのことを知ることがイエス・キリストの福音を教えるのに重要な鍵となる。

ここでもうひとつの例として、「悔い改め」を使ってみよう。

悔い改め は _____ のようなものである。

悔い改めにたとえることができ、だれもが知っている物は何であろうか。石けんとしてみよう。

悔い改め は 石 け ん のようなものである。

この考え方は次のように説明できる。

悔い改めは人生の石けんである。上手に使えば罪を洗うことができる。しかし、汚れたままでいる人もいる。それはどうしてだろうか。いつでもすぐに使えるのに、悔い改めを活用しない人が大勢いるのはどうしてだろうか。

悔い改めの間違った使い方については次のように説明できる。真っ白でまだ使っていないきれいなハンカチを泥の中に落とすとする。それは丁寧に洗濯すればまたきれいになる。しかし何回も落としては洗い、落としては洗えば、ハンカチは間もなく汚れがしみ込んで薄黒くなり、強力な石けんを使ってもきれいにするのが難しくなる。

ある時、セミナーの教師たちと一緒に席でこの類化の原則の話をして、悔い改めを教えるのにどんな物を使うか考えてもらったことがあった。すると1時間ばかりの話し合いの中で10以上もの例があがったのには感心した。

想像力を働かす

四角ばって堅苦しく考えると、たとえ主が用いられた物にしても、比較や関連づけがうまく行かない。従って、想像力を働かすことである。

悔い改めは石けんとは全く違うと主張した教師がいた。そのように言えば、天国は網とは違うし、パリサイ人は白く塗った墓ではない。独創的な想像力が必要である。想像

力を伸ばそうとしない人はおもしろ味のない非常に退屈な教師である。断固として写実を通ず人には、どんな類化も良しとしないであろう。(第6章「それは……のようだ」p. 28—31)

類化の原則とはどのようなものであるかわかったと思うので、ここで聖典に戻って、この教え方の例をいろいろ見てみよう。イエスは教える時に、必ずよく知っている物やよく経験している事柄を取り上げておられる。イエスが教えられた例を研究してみれば、平凡な説明の多いことがわかるであろう。イエスは卑近な例をあげながら、民の知っている事柄に関連づけて教えを説いておられる。

イエスと教えを聞く大半の人々とのひとつの共通点は、日常の生活経験であった。イエスの生活に関して私たちの知る限りでは、イエスは当時の平凡なひとり人間であった。そしてその教えは時代の世相を反映し、私たちに見せてくれる。

イエスは聞き手の知っている事柄に直接結びつけて、当時の若者たちに大きな関心のある宗教的な教えをよく話題にされた。……

日常のありふれた物

山上の垂訓はどんな挿話にも劣らぬ良い見本である。……その中のたとえ話には、類化に使う具体的な物がふんだんに見られる。主は話の中で、当時のパレスチナ人一般の生活になじみが深い事柄を取り上げたり、モーセの律法がよく知られている規則をたとえに出してユダヤの歴史を語られたりした。

にわとり、ひな、鳥、花、狐、木、盗人、追いはぎ、夕暮れ、金持ちや貧乏人、医者、つぎ当て、雑草取り、家の掃除、豚の飼育、もみ殻取り、納屋の蓄え、家の建築、賃労働、その他諸々のことを、イエスは話題にされた。不可解なことやばくぜんとしたことはひとつもなく、すべてを聞く人々の日常生活から引用された。

「……は……のようなものである」

イエスは常に、まわりの具体世界を私たちの内面の抽象世界と引き比べられた。何度も繰り返し繰り返し、「……は……のようなものである」という表現を用いておられる。

教えをはっきりとさせる

イエスは、当時の民にただ民の経験やまわりにある物のことを話ただけではなかった。そのことを忘れないでほしい。にわとりやひなのことを教えたのではなく、にわとりやひなを例に使う別のことを教えられたのである。イエスは目に見える世界の出来事を見えない内面の世界に関連づけて教えられた。応用や比較によって、教えを明らかなものとされたのである。……

説教中の応用は大切であった。塩のたとえ(マタイ5:13)を例に取れば、塩はあまりにありふれていて、このように話されるのでなければ人の注意など引きそうにもない調味料である。しかしわざわざ聞き手にそのことを考えさせるのが意図ではなかった。イエスの教えの中で使われている「塩」という言葉は、用途を教えるために出したわ

けではなく、それを踏み台にして、聞き手の過去の経験からもっと意味の深い大きなことを学ばせようとして使われたのである。

信仰、悔い改め、謙遜といった概念は目に見えないので教えるににくいということはすでに前に話した。大きさも形もなく、手で触れることができず、色もない。従ってそれを言葉に表わすことは難しい。しかし、イエスが使われた方法によれば、それらの概念をうまく教えることができる。

(第7章「それは聖書の中に」pp. 33—36, 38—39)

比較やたとえの素材はどこにでもある。見つけさえすれば、身のまわりにたくさんある。次の話を考えてみてほしい。

新しい世界

第2次世界大戦中に、私はアリゾナ州スコッツデールの近くのサンダーバード基地で士官訓練を受けたことがある。週末には時々フェニックスに出かけて、日曜の午後に基地に帰っていた。当時アリゾナ州のスコッツデールは、フェニックスの郊外にあって、大通りが交差しているだけの町だった。

ある日曜日のこと、私たち数人は車に乗れず、基地まで長い道のりを歩き始めた。道をとてて歩いていくと、一台の古い車が止まり、ひとりの紳士が私たちを乗せてくれた。人数が多すぎたが、ドアのステップにも立つことができ、みんなでにぎやかにしゃべりながら、ゆっくりと走った。生命のない無味乾燥な砂漠にぶつぶつ不平を言う者がいた。するとしばらく行ってから紳士が車を止めて、見せたいものがあると言った。

そして彼は自分を自然科学の教師だと紹介し、それから私たちは一緒に少しの間砂漠を歩いた。彼は私たちに草や動物や生き物を見せ、新世界に対する私たちの目を開かせてくれた。彼はしなびて死んだような植物を指差してこう言った。

「みんな春の雨を待っているんですよ。ほら。」そしてひからびてチリチリに縮んだ植物を指して、「水に入れてごらんさい。数時間のうちに開いて緑になりますよ。よく見れば、本当に非常に美しい植物なんです。近くで見ようとしなから、気がつかないんです。」

そのことがあってから、私の砂漠を見る目は違ってきた。砂漠はいつも美しく、私の心を強く引きつける。

類化の原則を理解しさえすれば、世界はそのように生き生きとしてくる。そしてどこを向いても、たとえに使えぬ価値のある物を見いだすことができる。

この教え方は視覚教材の世界を広げてくれる。類化の原則を身につけた時、生徒とのコミュニケーションに新しい視野が開ける。生徒の目に見える物を例にとって、見えない概念を理解させることができる。百聞は一見にしかずとか。

レッスンの中で「なぞらえる」ことのできるものを捜そうと努める教師は、新しい世界を発見するであろう。そして、ひとつの概念を現実の中に見いだすことが、時々現実理想を発見することでもあるということを知るのである。

(第9章「豊富な例に囲まれて」pp. 51—52)

1976年度に60のステーク部が 新設される

「シオンはその美と聖とを増し、その境域は拡がりそのステーク部は堅うせられざるべからず。」(教義と聖約82:14)

教会は自由世界全域で着実に発展を遂げており、それに伴ってシオンのステーク部も強くなっている。そして、1976年度には60のステーク部が新設され、年末時のステーク部総数は798に達した。なお、新設されたステーク部の内の16は、伝道部から設立されたものである。これら16の内訳としては、メキシコが7、カナダ、イギリス、ドイツがそれぞれ2、香港、台湾、合衆国がそれぞれ1である。

また、1977年1月中旬には、800番目のステーク部が組織され、メキシコ共和国ベラクルスステーク部と命名された。

1976年度に設立されたステーク部数は、1975年度の設立数よりもひとつ少なかったが、5年前に比べると2.5倍にのぼる。ちなみに1971年度の設立数をあげると24であり、その翌年の1972年度はそれより5つ多い29、1973年度は37、1974年度は44と、ステーク部の新設数は着実に増加している。

昨年はメキシコの2つの伝道部が急速な発展を遂げ、それぞれに3つのステーク部が新設された。メキシコ・エルモジヨ伝道部からメキシコ・チワナ、メキシコ・エルモジヨ、メキシコ・シウダードオブレゴンの各ステーク部、そしてメキシコ・トレオン伝道部からメキシコ・トレオン、メキシコ・チワ

ワ、メキシコ・シウダードファレスの各ステーク部が組織された。またもうひとつのステーク部はメキシコ・シウダードビクトリアステーク部で、これはメキシコ・モンテレー伝道部から設立されたものである。

大西洋を越えると、イギリス・リーズ伝道部からイギリス・リバプールステーク部とイギリス・プレストンステーク部が設立された。またドイツでは、ドイツ・フランクフルト伝道部からドイツ・フランクフルトステーク部が設立され、ドイツ・ミュンヘン伝道部の軍人地方部とドイツ・カイザーズラウテルンステーク部からドイツ・シュツットガルトステーク部が設立された。

さらに地球の反対側では、香港伝道部から香港ステーク部が設立され、台湾台北伝道部から台湾台北ステーク部が設立された。

カナダ東部では、カナダ・トロント伝道部からオンタリオ・ロンドンステーク部、カナダ・モントリオール伝道部からオンタリオ・オタワステーク部がそれぞれ設立された。

合衆国内で伝道部から設立されたステーク部はただひとつ、マサチューセッツ州ボストン伝道部からのバーモント州モントピリアーステーク部である。

以上はこれまで伝道部の管理下にあった地域に設立されたステーク部であるが、既存のステーク部の分割によって設立されたステーク部も数多い。

年度内に新設されたステーク部名を設立順にあげると、次の通りである。カリフォルニア州パロスバーデス、ア

リゾナ州テンベ南部、バージニア州フェアファックス、ニューメキシコ州ファーマントン東部、エルサルバドル・サンサルバドル東部、オレゴン州セレム北部、ミネソタ州セントポール、アリゾナ州メサ・ソルトリバー、フロリダ州ゲーンズビル、カンサス州トピカ、カリフォルニア州ブライズ、イリノイ州フェアビューハイツ、ユタ州オレム東部、チリ共和国サンチャゴ、テキサス州サンアントニオ東部、ユタ州セントジョージ・カレッジ、イギリス・ハートルプール、オンタリオ州トロント東部、カリフォルニア州カマリロ、ソルトレークグランジャー南部、オレゴン州ユージン西部、ドイツ・ドルトムント、カリフォルニア州チュラビスタ、ブラジル・リオデジャネイロ・ニテロイ、メキシコ・モンテレー・ローマ、メキシコ・モンテレー・アナワック、ユタ州サンディー・クレッセント西部、ワシントン州ケネウィック、オクラホマ州ロートン、オレゴン州グランツパス、グアテマラ・グアテマラシティー・ラスビクトリアス、イギリス・リーズ、テキサス州フォートワース北部、ユタ州ローガン大学第3、カリフォルニア州グレンドラ、カリフォルニア州サントアナ、ペルー・リマ・レーマナイト、ペルー・リマ中央、ワイオミング州ライマン、チリ・キルプエ、チリ・サンチャゴ・ヌノア、オハイオ州コロンバス東部、カリフォルニア州ランカスター、メキシコ・マデロ、ユタ州オグデン・テラスビュー。

青少年プログラム、再編成される

若い男性プログラムの指導者が召される

教会の青少年をさらに強めるために、若い男性と若い女性の組織が再編成されたことが大管長会より発表された。この再編成の一部として若い男性中央会長会が召された。この会長会は、青少年管理ディレクターを務める七十人第一定員会会長マリオン・D・ハンクス長老の指示の下に働くことになる。

若い男性プログラムの会長には、ソルトレークで弁護士業を営み、1972—75年にオーストリア・ウィーン伝道部の部長を務めたニール・D・シェイラー兄弟が任命された。そして副会長には、ソルトレーク・シティーで不動産会社の役員を務め、メルケゼデク神権中央委員会の委員を務めてきたグラハム・W・ドクシー兄弟と、ソルトレーク・シティーのスカッグズ社の副社長であるクイン・ガン・マッケイ兄弟が召された。この新しい会長会は、若い男性の全般に関して、教会幹部に対する諮問役員を務めることになる。

そのほか、中央会長会は、全教会の若い男性のためのプログラムならびにガイド、資料を計画し、展開し、相互調整する。これら会長会の3人は、若い男性中央管理会と共に、アロン神権定員会の学科課程およびガイド、地元

の指導者の訓練資料を準備し、全教会の若い男性プログラムの評価をも行なう。彼らはまた、教会中央スカウティング委員会の委員を務め、さらに若い男性中央管理会を管理する。中央管理会は3つの年齢別定員会委員会（執事、教師、祭司）に分かれ、それぞれに委員長がおかれる。また、中央会長会が以下のためのプログラムならびにガイド、資料を計画し、展開し、相互調整し、評価するにあたり、中央管理会は援助を与える。(1)アロン神権クラスレスと指導者訓練、(2)定員会活動、(3)若い男性の活動（スカウティングを含む）、(4)若い男性・若い女性合同活動。

青少年の部門は、神権役員会に属する3部門の内のひとつである。この神権役員会の会長は十二使徒評議員会のゴードン・B・ヒンクレイ長老が務め、マービン・J・アシュトン長老とL・トム・ペリー長老がそれぞれ役員を務める。また、役員会ディレクターはロバート・D・ヘイルズ長老である。この役員会は、メルケゼデク神権定員会とアロン神権定員会、ならびに補助組織の学習プログラムと活動プログラムを担当する。

シェイラー会長はこれまで教会で指

導者として様々な責任を果たしてきた。伝道部長の責任もそのひとつであり、ほかにソルトレークステーク部の副ステーク部長、高等評議員、副監督をも務めた。また、セミナー教師でもあり、テンプルスクエアのガイドでもあった。ジェーン・クーン姉妹と結婚し、現在4人の子供の父親である。彼はブリガム・ヤング大学で学士号を取り、ユタ大学で法学を修めている。

ドクシー副会長はこれまでに、監督、ソルトレーク大学第一ステーク部部長、ミズーリ州インデペンデンス伝道部部長を務めてきた。ユタ大学を卒業して、メアリー・ルイル・ヤング姉妹と結婚し、12児の父親となった。現在11人の子供が健在である。

マッケイ副会長は、3つのワード部で監督を務め、ステーク部日曜学校会長、高等評議員、副ステーク部長を歴任してきた。シャーリー・フレイム姉妹と結婚し、現在4人の子供がいる。彼はブリガム・ヤング大学で学士号、ハーバード大学で修士号と博士号をそれぞれ取得している。

若い男性会長会の幹部書記はリン・サマーヘイブ兄弟である。

家庭貯蔵品の売買

あるステーク部、ワード部、定員会では、食料品や貯蔵容器、その他の家庭貯蔵品の売買に関与しているとの報

告が寄せられている。ここで指導者の皆さんに再び注意を喚起したい。ステーク部、ワード部、定員会は、(食料品、貯蔵容器、宗教に無関係の書籍等)教会の免税対象とならない物品の商業活動を行なってはならない。(「教会指導

総合手引き」第21号pp. 96—97参照)しかし、教会とは別に独自のグループを作って家庭貯蔵品の一括購入を行なうことは自由である。この場合も教会が関与していると見なされるような方法をとってはならない。(管理監督会)

公 告

規則第18条の定める手続を経て、下記の通り教会支部用地を買収しましたので宗教法人第22条の規定によって公告します。

昭和52年7月2日

宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」

代表役員 アドニー・ワイ・小松

会員その他利害関係人各位殿

浜松支部集会所用地

教会翻訳配送事務所及び東京第一ワード部集会所

一の宮支部集会所用地

徳島支部集会所用地

教会地域本部宗務庁舎

昭和51年8月2日

51年12月22日

52年3月28日

52年4月18日

52年6月30日



日本名古屋伝道部
名東支部

武田 信和

模範による改宗

(1977年6月5日日本名古屋伝道部
中部地方部大会における話より)

皆さん今日は、きょうこうして大勢の皆さんの前で話す機会を与えられたことを感謝します。このように沢山の人の前で話すことは私にとって、初めてのことで、ほんとうに光栄に思っています。

私は、名古屋の第6、名東支部の武田と言う者です。隣にいます妻と大学1年と高校2年のふたりの娘を持つ父親です。最初に上の娘がこの教会の会員になりました。そして少し遅れて、今年の4月1日に夫婦そろってバプテスマを受けました。下の娘はまだ興味がありませんが、3人の模範によって、教会に関心を持つようになることを願っています。

きょうは、私がどのようにしてバプテスマを受け、この教会に入ったか、聞いていただきたいと思えます。

私は娘から聞くまで、この教会についてほとんど何も知りませんでした。娘は機会があって、去年の夏から熱心に教会に通っていました。私は娘が変な方面に関心を持つより、宗教に関心を持ってくれるのであれば、まあいいだろう、といった程度に考えていました。また、娘の方も自分から教会の教えについて話をすることもありませんでした。きっと話しても聞いてくれないと思っていたからでしょう。ところがその内に、「バプテスマ」というものを受けて会員になりたい、そのために両親の承諾がいる、と言い出したことから、わが家に大問題が起きました。コーヒー、紅茶は飲めない、お茶もだめだと言うのです。これは問題です。妻もそんなことになったら結婚にも影響するし、ゆるすわけにはいかない、私からもよく言ってくれ、それは父親の責任だと言いました。こうしたことから、この教会のことについて、今までのように無関心ではいられなくなりました。それからいろいろなことがあって、私たち夫婦もレッスンを受けるようになりましたが、最初はなかなか素直に理解できませんでした。理論的に神の存在を説明するよう求めたり、考古学的裏づけを求めたり、またニーチェの虚無主義やハイデガーの実存主義、カントの純粹理性批判など、学生時代にかじった薄ぺらな知識を持ち出して、レッスンをいつもいつも遅くして宣教師に迷惑をかけました。しかし今思い出して見ると、それはただ単に、心のない、議論のための議論でした。親子程も年の違う宣教師に対して、ほんとうにはずかしい気持ちで一杯です。それに対し、宣教師の言葉にはひたすらに神を信じる強い信念がありました。このようにしてとにかくレッスンは進みましたが、どうかすると、また振り出しに戻って、最初の議論の繰り返しになりました。

しかし、宣教師のひたむきで純真な模範に接するごとに、少しずつ気持ちが変わってきました。そして宣教師に教わって、見様見まねでお祈りを始めました。最初は「アー

ン」と言う言葉が素直に口に出せませんでした。しかしその内に祈ることがなぜか快く感じられるようになってきました。レッスンにおいても、批判的な気持ちから、少しでも理解したいと言う気持ちに変わってきました。そして、いよいよバプテスマを受けるように勧められました。しかし自分としては、まだ教義についても十分に理解ができていないし、とてもバプテスマを受ける資格はないと話しましたが、とうとう4月1日にバプテスマを受けることになりました。私が最後に決心をしたのは、宣教師や教会の多くの兄弟姉妹と、そしてわが子の模範を見て、自分もあのようにになりたいと言う強い希望と、それからまた、現在私たちは失業と言う大きな試練に出会っていますが、まだ知り合って間もない私たちのことをほんとうに自分のことのように心配して下さった伝道部長さんや宣教師、兄弟姉妹の温かい気持ちに接して、これから生涯この方々の仲間に入れていただきたいと強く感じたからです。

そして、きょうまで、皆さんの後について歩んでまいりました。ですから、こうして皆さんに聞いていただけるような立派な話は何もありません。ただ、自分の実感としてひとつだけ言えることは、謙虚な気持ちで祈り、また聖典を読んでいると、自然に平安な気持ちになるということでした。例えば、食事の前に感謝のお祈りをして食べますと、食事に対して不平や不満は出ませんし、和やかにおいしく食事を頂くことができるということです。これには何の理屈もありません。確かなことです。同じように人々と話す時にも、この祈りの心を持ってすれば、初めて会った人でも、ほんとうに打ち解けた気持ちで話すことができます。このようにして一日一日を過ごして行けば、結局一生を心豊かに生きて行けるのではないのでしょうか。私はまだ日が浅く、聖典も十分に勉強していませんが、毎日、朝晩、神さまとお話する気持ちでお祈りをしています。そして少しずつ聖典も読んでいます。

私がバプテスマを受けたのは、このように宣教師や兄弟姉妹の模範を見て、自分もあのようにになりたいと思ったからです。ですから私も教会のことについて話す時には、教義についていろいろ説明する前に、まず自分の模範を示すことが確かに大切だと思います。そうすれば、向こうから、この教会に関心を示すようになると思います。ささやかな体験ですが、今日こうして大勢の兄弟姉妹の前でお話することができて、それによって、自分の信仰が強められることを、心から感謝します。また、これまで、私たちを御指導下さった伝道部長、宣教師、そして多くの兄弟姉妹にほんとうに、ほんとうに、心から感謝申し上げます。すべてをイエス・キリストのみ名によってお話致しました。アーメン。

弱さを克服しながら

日本岡山伝道部
柳井付属山口支部

森重和良



かつて非常に恐ろしい経験をしたことがあります。もう4年も前のことですが、首筋に小さなシコリができたのです。別に痛みもなく、何の支障もありませんでした。しかしある時、「もしや癌では」という思いが脳裏をよぎりました。私の縁者で癌のために亡くなった者が多かったからです。私の心の中に墨を流したように不安が広がってきました。そして、その不安が強烈な死の恐怖となって、私を襲い始めました。

人間の生とは何だろう。死とは何だろう。また、人は死んだらどうなるのだろうか。何もかも消滅するのだろうか。愛する家族、友達、縁者とは……。こうした思いが循環して私はひとり思い悩み、やがて不眠症になってしまいました。かつて、自分の生と死についてこれほど思い悩んだことはありませんでした。また、これほど身近に生と死を感じたこともありませんでした。病院で診察の結果、しこりが脂肪瘤であると判明した時、不安は一時的には去りました。けれども、完全な解決とはいえませんでした。人生において、生と死が常に隣合せであることを、いやというほど思い知らされたからです。この悩みを人に打ち明けることはできません。そこで私は、何か心の支えになるものを探し、本を読み始めました。「道は開ける」など、精神を高揚させる書物をあれこれ読むうちに、それらの教えがキリストから、つまりみな聖書の中から採り上げられているということに気が付き、今まではあまり関心なかった聖書やキリストに関する文献、また小説を読みあさるようになりました。真理についてはよくわかりませんでしたが、少し心に平安を得るようになり、聖書のマタイ伝第6章にある、「あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」という言葉が非常に印象に残りました。そのような状態で悩みも少しずつ去り、大阪から山口へと転勤になり、結婚もして何とか平和な生活を過ごしていました。

そんなある時、1975年の10月半ばでした。ふたりの若い外人宣教師が私たちの家を訪問してくれました。キリストの言われた「この世の真理」について知りたかった私は早速レッスンを受け、モルモン経を与えられ、わずかですが真理について理解できるようになりました。そしてレッスンが進むにつれて、天父とイエス・キリストに対する証も自分なりに持てたと思えました。普通の方で私のような経験をされた人は、即この教会に入られたと思います。「永遠の命」があるのですから。しかし私の場合は、知恵の言葉

等、多くの問題がありました。素晴らしい真理に触れる機会に恵まれながら、人間としてのどうしようもない弱さがありました。社会人になってから8年、俗世の中に身を委ねてきた私にとって、また妻にとって、バプテスマのチャレンジはとてつもないものでした。これまでの生活観を全く変える未知への不安と、対人関係を改めること、特にお酒に関する事などで、私にはとてつもないと思えました。本当に何度挫折しかけたことでしょうか。その度に、良心と弱さの板ばさみになって悩みました。自分自身に失望しました。モルモン経を読むことが苦痛にさえなったこともあります。しかし、心の中では絶えず、「勇気を出しなさい、神の言葉に従いなさい」という声なき声の呼びかけがありました。そして延べ十人に及ぶ宣教師や多くの兄弟姉妹の愛と励ましにより、また断食と祈りにより、神様の強い導きを受けて、本当に弱かった私たちが少しずつ戒めを守れるようになりました。1976年11月20日、実に1年1ヵ月を要して、私たちは多くの兄弟姉妹の温かい祝福の中でバプテスマを受けることができました。全くこれは主の導き以外の何ものでもありません。苦しいこともあります。心に平安を得ることができました。未来への大きな希望もあります。家族の絆は愛と理解によって強くなります。ニーマファイは、「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてある」と言っています。まことに「主の山に備えあり」(創世22:14)とされているように、主の業には備えがあります。パウロは第二コリント第12章でこう言っています。「主がいわれた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。』それだからキリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう」。私のような弱い人間にとって、この言葉はどんなに励みになったことでしょうか。私に弱さがなかったら、神を求めたこと了吗、神に頼ることをした方がいいか。私は考えるのです。

こうして振り返ってみると、多くの弱点を持つ私たちですが、主の戒めと慰めと導きにより、また支部長をはじめ多くの兄弟姉妹の助けと励ましによって、少しずつ弱点を克服し、私たちなりに成長の跡を見ることができました。

これからも、柔和、謙遜、忍耐をモットーに、家庭の中に「愛」と「希望」と「信仰」が育つよう、そしてもっと強い証が得られるように頑張っていきたいと思えます。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

「大管長は非常に親切で温かな方です。彼と同じワード部にいられるのは特権です。」

「彼女は実に満点の人です。家にいれば必ず集会に出席しますし、家庭訪問教師として訪問の割当てを受けた姉妹たちに対して、心から愛と関心を寄せています。」

「感心するのは、大管長は30億の人々の予言者で、350万人から予言者として敬われている人であるのに、いつでも病人を見舞う時間があることです。」

「大管長はいつでも教会員みんなのために祈っています。」

（本号「予言者の隣人」p.357）